

クロスロード

8



2019 AUGUST

特集1

青少年活動分野の活動ポイント

特集2

任期序盤の留意点



現在の派遣国数

79 カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2019年6月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	32	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	30	
ガーナ	45	2
ガボン	18	7
カメルーン	18	1
ケニア	40	6
ザンビア	73	11
ジブチ	11	
ジンバブエ	5	
スーダン	10	
セネガル	42	3
タンザニア	59	3
ナミビア	13	
ブルキナファソ	14	
ベナン	47	
ボツワナ	12	
マダガスカル	30	
マラウイ	56	
南アフリカ共和国	4	6
モザンビーク	37	3
ルワンダ	41	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	13	
インドネシア	12	2
ウズベキスタン	24	7
カンボジア	26	10
キルギス	26	
スリランカ	22	
タイ	31	5
タジキスタン		3
中華人民共和国	10	
ネパール	50	4
東ティモール	31	
フィリピン	28	2
ブータン	18	6
ベトナム	39	16
マレーシア	19	7
ミャンマー	9	4
モルディブ	13	
モンゴル	37	
ラオス	31	2

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	6	
サモア	22	1
ソロモン	30	5
トンガ	14	2
バヌアツ	19	4
パプアニューギニア	29	5
パラオ	10	5
フィジー	22	3
マーシャル	8	1
ミクロネシア	7	8

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	1	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
イラン		1
エジプト	14	3
モロッコ	21	6
ヨルダン	28	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		18	3	6
ウルグアイ		6		
エクアドル	50	5		
エルサルバドル	8			
キューバ		1		
グアテマラ	21	3		
コスタリカ	22	10		
コロンビア	14	12		
ジャマイカ	22	12		
セントビンセント	4			
セントルシア	8			
チリ	5	4		
ドミニカ共和国	37	7	3	1
ニカラグア	1			
パナマ	13	1		
パラグアイ	38	2	7	2
ブラジル			68	20
ペリーズ	14			
ペルー	43	5		
ボリビア	34	1	2	
ホンジュラス	25			
メキシコ	2	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,673 (735/938)	256 (184/72)	83 (27/56)	29 (11/18)	2,041 (957/1,084)
累計 (男性/女性)	44,913 (23,919/20,994)	6,497 (5,256/1,241)	1,476 (563/913)	542 (252/290)	53,428 (29,990/23,438)

JV = 青年海外協力隊

SV = シニア海外ボランティア

日系JV = 日系社会青年ボランティア

日系SV = 日系社会シニア・ボランティア (単位: 人)

クロスロード

2019 AUG
Contents

■職種別索引 掲載ページ

コミュニティ開発	16、22
バイオテクノロジー	24
青少年活動	1、6、8、10、28、36
野球	4
理数科教師	26
体育	4
小学校教育	20
美容師	14
栄養士	18
福祉用具	25

■国別索引 掲載ページ

ウガンダ	4
エクアドル	24
グアテマラ	14
ケニア	18
ジブチ	10
セントルシア	6
東ティモール	22、25
ブータン	20
ブルキナファソ	4
ホンジュラス	1
マラウイ	26、36
ラオス	8
ルワンダ	16

■出身都道府県別索引 掲載ページ

宮城県	20
群馬県	25
埼玉県	10
東京都	6、14
新潟県	8、22
岐阜県	36
愛知県	26
大阪府	16
長崎県	18、24

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度1次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニアボランティア」）の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY

レイアウト：S+M DESIGN FACTORY

印刷・製本：弘報印刷（株）

4

JICA Volunteers' NEWS

東京オリンピック野球競技 アフリカ予選大会

▶予選大会での経験をウガンダ野球の発展につなげる（ウガンダ）

▶体育隊員がブルキナファソ野球代表チームを総合的にサポート（ブルキナファソ）

特集1

青少年活動分野の活動ポイント

6

CASE 1 少女自立支援施設

三浦真依子さん（セントルシア・青少年活動・2016年度2次隊）

8

CASE 2 青少年センター

佐藤葉月さん（ラオス・青少年活動・2016年度2次隊）

10

CASE 3 難民支援

森 勇樹さん（ジブチ・青少年活動・2016年度3次隊）

12

活動Q&A集

特集2

任期序盤の留意点

14

CASE 1 自己PR

相馬千春さん（グアテマラ・美容師・2016年度4次隊）

16

CASE 2 活動スタイルづくり

小郷智子さん（ルワンダ・コミュニティ開発・2016年度4次隊）

18

CASE 3 課題発見

八尋祥子さん（ケニア・栄養士・2016年度3次隊）

20

CASE 4 ネットワークづくり

千葉江里さん（ブータン・小学校教育・2016年度3次隊）

22

“失敗”から学ぶ

トラン智美さん（東ティモール・コミュニティ開発・2016年度3次隊）

24

希少職種図鑑

▶バイオテクノロジー 西川正雄さん（SV/エクアドル・2015年度1次隊）

▶福祉用具 宮田祐介さん（東ティモール・2016年度1次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

エネルギー総合プロデュース企業 社員 平塚千都さん（マラウイ・理数科教師・2011年度1次隊）

28

OB・OG匿名座談会

青少年活動篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

好きな布でエコバッグをつくろう！／筋トレで健康に！／あるもので思い出の味

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「生活の知恵」

35

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介

東京オリンピック野球競技 アフリカ予選大会で、 派遣国の代表チームを支えた隊員たち



ウガンダ代表選手と田中さん。ウガンダチームは、19年4月にケニアで行われたアフリカ大会1次予選で優勝。2次予選に進み、順位は2位だった。大会参加について予算不足で登録選手を4人減らすなど資金繰りに田中さんは頭を悩ませたという。「野球関係者、JICA関係者の皆様、協力隊の仲間たち、その他大勢の皆様にご協力を頂くことで、何とか大会に参加することができました」と田中さんは協力者への感謝を伝えた

Uganda

予選大会での経験を ウガンダ野球の発展につなげる

文 = 田中勝久さん (SV/ウガンダ・野球・2016年度4次隊)



南アフリカ共和国で開催されたアフリカ予選大会で国歌斉唱するブルキナファソ代表チーム。チームの監督は協力隊OBの出合祐太さん(ブルキナファソ・野球・2007年度4次隊)。ブルキナファソチームは、19年4月にガーナで行われたアフリカ大会1次予選で優勝し、2次大会に参加。健闘したものの順位は4位だった

Burkina Faso

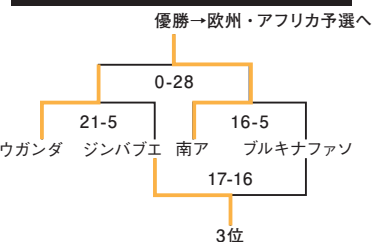
体育隊員が ブルキナファソ野球代表チームを 総合的にサポート

文 = 川畑陽平さん (ブルキナファソ・体育・2017年度2次隊)

【アフリカ大会2次予選の結果】

国名	予選リーグ			
	🇸🇩	🇸🇪	🇸🇪	🇸🇪
ウガンダ	○	○	○	●
ジンバブエ	●	○	○	●
ブルキナファソ	●	●	○	●
南アフリカ共和国	○	○	○	○

トーナメント戦(準決勝・決勝・3位決定戦)



私は、2011年6月から3年間、野球隊員としてウガンダ野球協会に派遣され、17年4月からはSVとして同国で野球の指導をしています。

東京オリンピック予選大会の準備にあたり、資金面は、約2年前の派遣時からウガンダのオリンピック協会及び国家スポーツ評議会と情報を共有。また、代表候補選手の準備は、前回派遣時より始めており、野球場の建設、代表候補選手の日本への派遣、ウガンダ国内リーグの強化に取り組むなど、長期に渡る準備をしてきました。

派遣当初から、月に1回、代表チームの練習を実施。一部の候補選手には球場周辺に宿泊してもらい、共に技術の向上に努めてきました。前回の派遣時から指導し続けている選手も多く、海外でのプレーを経験している選手もいます。彼らと共にチーム力を高め、今回の大会に挑みました。

しかし、参加にかかる費用は、強化合宿の費用はもちろん、大会参加への交通費、宿泊費、食費など、前述の団体やウガンダ政府から賄われず、海外のスポンサーやJICA関係者に協力してもらい何とか費用を確保し、参加できたのが実情です。

東アフリカ予選(1次予選)で優勝し、2次予選に進みました。私たちウガンダ野球協会は「打倒・南アフリカ共和国(以下、南ア)」を目標に掲げ、挑んだ大会でした。14年には、U18の大会でも一歩のところまで南アと競り合ったので「今回の大会で絶対勝利しよう」と試みましたが、結果は大敗でした。原因は多くありますが、大会

までの準備、試合経験の差が大きく、「ウガンダ野球が南アを倒し、世界に旅立っていくにはまだまだ差がある」と同協会、選手共に感じられた貴重な経験となりました。

今後南アに勝つため、どうウガンダ野球を発展させていくか議論を重ねています。資金や環境などの課題を抱えていますが、世界と戦うため、野球文化を世界基準に近づけることが解決策のひとつだと考えています。例えば、国内リーグでは、資金不足で揃いのユニフォームやスパイクがないなど、「ウガンダだから」と受け入れてきた側面を改善することなどです。細かい部分を世界基準に合わせなければ、勝てないとわかったことが、今回の収穫でした。

ウガンダ野球のポテンシャルは近年、世界の野球関係者が知るようになっており、大リーグ・ドジャースのスカウトも駐在しています。12年から日本の独立リーグで活躍する選手、米国の大学と契約する選手も出てきました。子どもたちの夢も当然日本やアメリカでプロ野球選手になることです。

今回オリンピック予選に参加した選手、コーチたちはさらなる発展のため、子どもたちがより大きな夢を持てるよう努力していくはず。いつかウガンダ野球が世界と互角に戦えるまで彼らを応援し続けたいと思っております。本当に悔しい思いもりましたが、このような感情が大きく揺さぶられるような熱い経験を与えてくれたウガンダの選手、コーチたちには野球人として感謝の気持ちでいっぱいです。

「ありがとうウガンダ野球」



代表チームの練習でノックをする川畑さん(左)

2018年8月、ブルキナファソ野球国内大会決勝でクドゥグ(任地)のチームが勝利負け、ある選手が悔し涙を流していたことをよく覚えていた。これが代表チームのコーチとして活動を始めるきっかけとなった。

私の普段の活動は、学校での体育授業の実施やクラブ活動の指導だ。日本から野球道具の支援を受け、少年チームをつくり、その指導にもあたっている。既存の高校生野球チームは思春期特有の反抗心があり手を焼いたが、少年チームを中心に指導していくうち高校生チームも熱が高まり、国内大会優勝を目標に始動した。

その国内大会は準優勝に終わったが、高校生の普段見られない真剣な表情を見ることができた。「彼らが本気ならチャレンジさせてみようか」と思い、他県の選手にも声をかけ東京オリンピック予選に向けた代表選考会を企画し、首都で開催。クドゥグからは3人が代表入りした。多くの代表選手が所属する首都チームの練習もこの国特有の緩さがあり、本番の試合では過

度の緊張から動けなくなるのが目に見えた。普段の練習に緊張感を持たせなければならぬ。週末は任地の選手と上京し、3週に1度は紅白戦を実施した。

予選大会の遠征では、さまざまな問題に直面した。予算オーバーでほかのホテルを出発前に探す事態に陥ったことや、バスポート手続きの問題などがあつたが、チームプレイで何とか乗り切った。

ガーナで行われたアフリカ大会1次予選を無事に勝ち上がり、19年5月1日に南アフリカ共和国での2次予選を迎えた。14人で5日間5試合のスケジュールを勝ち抜くには、各々がしっかりと役割を果たす必要がある。ブルキナファソ野球連盟のスタッフは、審判、会議と奔走していたので、私には食事や移動手段の手配、ビデオ撮影などの総合的サポートが求められた。

初戦は雲居気にもまれ、動きの硬さが目立った。練習の成果をほとんど発揮できず、精神的弱さが随所に出た。しかし、徐々にやるべきことがはつきりし、強国にもアグレッシブに戦うことができた。連戦で疲労困憊の中、最後まで勝機を見出し続けた姿勢に、代表としての自覚、責任の芽生えを感じるとともに大舞台を楽しんでいるように見えた。最後の3位決定戦では延長11回にサヨナラボークで敗れた。そのときの彼らの表情は今でも覚えている。本気になれば色んなことを変えられるということを彼らから教わった気がする。

今後は、彼らと国内大会を運営し、多くの人々が熱くなれる場をつくりたい。



青少年活動分野の活動ポイント

CASE 1 少女自立支援施設

三浦真依子さん (セントルシア・青少年活動・2016年度2次隊) の事例

地域でのボランティアで、少女たちの「自己有用感」や「思いやりの心」を醸成

非行や被虐待などの経験を持つ少女が通う自立支援施設に配属された三浦さん。地域の高齢者施設や特別支援学校などでボランティアを行う授業では、念入りな事前学習を取り入れることで、少女たちの主体性や対象者を思いやる心をじっくりと育てていった。



① 少女たちが高齢者施設に赴いて開いたクリスマスパーティーでのひとこま。高齢者とダンスを楽しむ姿が見られた
 ② 高齢者施設でのクリスマスパーティーに先立ち、手づくりした装備で高齢者の体の不自由さを疑似体験する少女たち
 ③ 特別支援学校に赴き、児童たちに工作の指導をする少女たち
 ④ 近隣の小学校の6年生と「イースターの昔と今」をテーマにした劇を創作し、他の児童に披露するプログラムも行った

三浦さんが配属されたのは、非行や被虐待などの経験を持つ12〜16歳の少女を受け入れる通所型自立支援施設。国語や算数などの基礎教科や、パソコンなどの実技教科の授業が、毎日5コマずつ実施されていた。登録している少女は常時十数人程度で、授業を担当する職員は4人。9月に年度が始まる3学期制で、2学期間通って巣立っていくことが目安とされていた。

着任早々、三浦さんは自身の活動について配属先の幹部と話し合いを実施。「施設に外からボランティアがやってきて、編み物などを教えてくれることは多いけれど、少女たちが施設の外でボランティアをする機会は少ない」。幹部が口にしたそんな課題意識が発端となり、少女たちが地域でボランティアに取り組み、「地域奉仕活動の授業」の立ち上げが決定。三浦さんと同僚教員のひとりが担当することとなった。「自分は社会にポジティブな影響を与えられる存在だ」という「自己有用感」を少女たちが獲得する一方、少女たちに対する「どうせ不良だ」という地域のネガティブな見方もなくなる――。

事前学習で「高齢者」について学ぶ

「地域奉仕活動の授業」は週に1回、連続する2コマが当てられることとなった。授業の最初のプログラムとなったのは、近隣の2カ所の高齢者施設を訪問。職員に質問をする場を設けた。「どうして高齢者はシワだらけなの?」。そんな屈託のない質問に対し、職員は「あなたたちの皮膚も、伸ばしたらすぐく広いのよ」などと懐が深い受け答えをしてくれたらうえ、高齢者とかかわる楽しさも語ってくれた。

③ アクティビティの準備

当日に行うアクティビティの準備を始める。事前学習や施設見学の効果が顕著に現れた。少女たちが自らアイデアを出してきたのだ。そうして、「ダンスを披露する」「クリスマスソングを高齢者たちと一緒に歌う」といったプランが固まると、練習を開始。少女たちは高齢者に渡すプレゼントの製作も自発的に行った。

④ 当日と事後学習

迎えた当日。少女たちは各アクティビティを真摯にこなし、最後には高齢者たちと手を取り合っけて別れを惜しむ姿が見られた。その後、「振り返り」の学習として、当日の様子を撮影した写真とコメントで構成する「思い出壁新聞」を3部作成。1部は活動先に掲示し、残りの2部は少女たちが高齢者施設に届けた。事後に少女たちにとったアンケートでは、「人の気持ちになんて考えることができるようになった」「自分に自信がついた」といった変化が現れていた。

子どもたちに幅広い教育を提供する青少年活動隊員には、「隊員が導入したアクティビティを、帰国後に継続してもらうためにはどうすれば良いか」といった共通の課題が存在する。それらへの対処方法について、各種事例を通じて探ってみる。

高齢者施設でクリスマスパーティーを開く取り組みだ。従来、クリスマスに施設の少女たちが高齢者施設を訪れることは恒例となっていた。しかし、なかば強制的に歌を歌わせるだけという、少女たちにとって教育効果の薄いものになっていたとのことだった。三浦さんの着任は11月で、本番まで約1カ月半。三浦さんたちは「事前学習」を含む以下のような段階取りを進めていった。

① 事前学習

最初の授業では、「高齢者」についてどのようなイメージを持っているか、少女たちに尋ねた。すると、「怠け者」「怖い」「ちゃんと考えることができない」など、ネガティブな言葉が多く挙がる。そこで次に行ったのは、高齢者の立場を理解させるための授業だ。まず、「段ボールを自分の関節に巻いて動いてみる」といった方法で、高齢者の体の不自由さを疑似体験するアクティビティを実施。続いて、「アルツハイマー病の人に日常がどう感じられているか」を描いたドキュメンタリーフィルムを鑑賞させた。そうしてあらためて最初の授業で少女たちが挙げた高齢者のイメージを提示し、「みんなが挙げた特徴は、加齢による体や脳の変化が原因なこともあるんだよ」と説明。すると、少女たちは神妙な面持ちで話を聞くのだった。

② 施設見学

事前学習を終えると、少女たちを引率して対象の高齢者施設を訪問。職員に質問をする場を設けた。「どうして高齢者はシワだらけなの?」。そんな屈託のない質問に対し、職員は「あなたたちの皮膚も、伸ばしたらすぐく広いのよ」などと懐が深い受け答えをしてくれたらうえ、高齢者とかかわる楽しさも語ってくれた。

「やさしさ」を引き出すプログラム

三浦さんが同僚とともに手探りで形づくっていったこのクリスマスパーティーの段取りは、以後、「地域奉仕活動の授業」のフォーマットとして定着した。たとえば、近隣の特別支援学校に赴き、その児童たちに工作などを教えるプログラム。自閉症やダウン症など、見た目にはわかりづらい障害がある子どもたちが通う学校で、配属先の少女たちは従来、「頭がおかしい子たち」などとあざける言葉を口にすることもあった。ところが、自閉症児が「100匹の蟻が体を這っているように感じる」などと自身の感覚を語るドキュメンタリーフィルムなどで事前学習を重ねると、少女たちの姿勢は変化。事後に特別支援学校の校長から「少女たちは当校の子どもたちに心を開いて接していた」との評価をもらうことができた。他方、授業とともに担当した同僚は「これまで少女たちの間にはいじめなどもあったが、このプログラムによって彼女たちはやさしく、繊細になった。今回の交流は、素晴らしい初めの一歩だと思ふ」と、同種のプログラムの継続に意欲を見せてくれたのだった。



三浦真依子さん

Profile

1988年生まれ、東京都出身。2011年に大学を卒業後、教育関連の団体に就職。16年10月に協力隊員としてセントルシアに赴任。18年10月に帰国。

活動の概要

少女を対象とした通所型自立支援施設「アプトン・ガーデンズ・ガールズ・センター」(カトリーズ市)に配属され、施設の少女たちが主体となって行う以下の各種プログラムの運営を支援。

- 高齢者施設でのクリスマスパーティー
- 特別支援学校での交流会
- 保育園での職場体験
- 小学生との合同演劇会
- 公開フォーラム(少女たちの発案による、差別問題をテーマにしたものなど)

事例のポイント!

「事前学習」でじっくり「主体性」を育てる!!

子どもたちを地域とつなぎ、そこからさまざまなことを学ばせる活動では、「一過性のイベント」に終わらせないためにも、念入りな「事前学習」で子どもたちの主体性を育てることが重要だろう。



① 伝統芸能の人形劇「イポック」の人形を持つ「センター」の子どもたち
 ② 佐藤さんが担当した日本語授業の様子
 ③ 日本語授業のなかで浴衣を経験する子どもたち

CASE 2

青少年センター

さとうはづき 佐藤葉月さん（ラオス・青少年活動・2016年度2次隊）の事例

同僚たちの得意技を引き出し、「指示待ち」の状態からの脱却を後押し

子どもたちに課外活動の場を提供する施設に配属された佐藤さん。プログラムの支援に取り組む一方、同僚たちが内に秘めていた「より良い施設にしたい」という思いを後押しする役回りも果たした。



ラオスには「子ども文化センター」と名付けられた施設が各地にあり、小学生から高校生に無料で課外活動の場を提供している。佐藤さんが配属されたのはそのうちのひとつで、ルアンパバン県にあるもの（以下、「センター」）。着任当時、専属の教員7人によって図工や音楽など各種プログラムが行われており、平日は約20人、休日は約100人が利用していた。

子どもたちが伝統文化の継承者に

同県はユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されている旧市街がある古都で、国内最大の観光地。そうした環境を生かして「センター」で行われていたのが、「イポック」と呼ばれる伝統芸能のプログラムだ。イポックは棒で操る人形で民話などを演じるもので、同県が発祥の地。演じ手の高齢化により廃れてしまおうおそれがあったなか、センター長の指導のもと、「センター」の子どもたちが継承者を目指して練習を重ね、ときおり「センター」内や観光ホテルなどで観光客を相手に披露していた。

佐藤さんの着任は、ちょうど観光シーズンが始まる時期。そこで、このイポックのプログラムをサポートすることが、最初の活動となった。武器となったのは、米留学で培った「英語力」だ。英語が得意ではなかったセンター長からの依頼で、ラオス語から英語へのセリフの同時通訳や、イポックの概要と各演目のストーリーを英語で伝える外国人向けパンフレットの制作などを請け負った。

任期を通して佐藤さんのメインの活動となったのは「日本語」の授業。開始は着任の3カ月後だ。「センター」の子どもが日本を訪れ、日本の高校生と交流するプログラムが実施される見込みとなり、にわかに日本語学習の熱が高

く、「センター」の運営に関する彼女たちの考えを探ることにした。その際に気付いたのは、自分はいくまで「外部者」として中立の立場にある者であり、センター長ばかりに肩入れするつもりはないのだと理解してもらったこと。すると同僚たちは、「こうすれば『センター』はより良くなる」という考えを内に秘めていることが見えてきた。たとえば、「ウェブサイトの編集は外国人ボランティアに任せっ放しにすべきではない」といった意見だ。

そうして彼女たちの仕事に対する熱意を確信した佐藤さんは、その熱意が発揮できるようにするための支援に取り組もうと考えるようになった。その具体的な策のひとつは、同僚たちの「得意技」を生かす道をつくることだ。「センター」では従来、授業を担当する教員が休みの際、センター長からの依頼で佐藤さんや同僚が代わりにその授業を担当することもあった。しかし、センター長が不在のときは「指示待ち」の状態となり、その授業の子どもたちは放っておかれていた。一方、同僚たちにそれぞれの「得意技」を尋ねてみると、たとえば「演劇」の授業を担当していた同僚が実は「工作」も得意であること、あるいは「英語」の授業を担当していた同僚は「歌うこと」が大好きであるこ

まったのだ。時間割に新たに組み込まれた日本語の授業は週に3コマ。佐藤さんはそこで一教員として、ときに書道など日本文化の紹介も交えながら日本語の指導を進めていった。子どもたちの日本行きが叶ったのは、佐藤さんの任期終了まで残り3カ月ほどという時期だ。訪れた先々では、イポックの上演も実施。それについては事前にセンター長と打ち合わせを重ね、クオリティを上げるための工夫をした。

そのひとつが、「同時通訳」をやめ、舞台脇のスクリーンにセリフやト書きの日本語訳を流すという方法に替えたこと。劇のテンポが同時通訳で乱れることのないようにするための改良である。これが思いのほか有効だったことから、以後、ラオス国内で上演する際にも、舞台脇のスクリーンに英語訳を流す方法を導入。それにより、佐藤さんが帰国した後も、外国人観光客にストーリーを理解しながら楽しんでもらえる上演を続けることが可能になったのだ。

同僚たちの間の「潤滑油」に

以上のように個々のプログラムの支援に携わったから、佐藤さんは「センター」の運営体制をより良くするための支援にも力を入れた。

着任当初、カウンターパートにあたるセンター長と二人三脚でイポックのプログラムに取り組むことが活動の中心だった。そうして彼女との関係が深まる一方、ほかの同僚たちとは「センター」に関する話をするチャンスがなかなか見つけられなかった。彼女たちはそれぞれの担当授業を単独で行っていたうえ、「センター」は「トップダウン」の傾向が強く、同僚たちが「センター」をより良くするために意見を交換し合うという風土がなかったからだ。

そこで佐藤さんは、一緒に食事をするときなどながわかった。そこで佐藤さんは、センター長の依頼で休みの教員の授業を代わりに担当する際、「私にはわからないことがある。同僚の手を借りても構わないですか？」とセンター長に相談。その了承を取り付けたうえで、そのアクティビティが得意な同僚を授業に勧誘した。すると彼女たちは、子どもたちが生き生きとする授業を実現するのだった。

そうしたことが度重なるうちに、やがて同僚たちの間には「自発的に動いていこう」という意識が醸成。そうして、センター長が不在のときには休みの同僚の授業をほかの同僚が進んで担当するようになったのだ。

事例のポイント！

「外国人」の立場を生かした役回りを!!

下の人間が上の人間に意見を言いつらいという配属先もあるだろう。外部者である協力隊員には、両者の間の風通しを良くし、「ボトムアップ」の職場改善を促す役目を果たすことができる。



佐藤葉月さん

Profile

1986年生まれ、新潟県出身。2010年に米サンディエゴ州立大学を卒業し、不動産投資系の会社に就職。16年10月、協力隊員としてラオスに赴任。18年10月に帰国。

活動の概要

ルアンパバン子ども文化センター（ルアンパバン県ルアンパバン郡）に配属され、主に以下の活動に従事。

- 伝統芸能の保存活動の支援
- 日本語や日本文化の授業の実施
- 工作などの授業の支援
- 英語の指導



① パズルで図形を学ぶ「タングラム」という教材で算数の勉強をする学習教室の子どもたち ② ショッピングモールの遊戯施設への遠足で、トランポリンを楽しむ子どもたち ③ 学習教室の子どもとその保護者が参加した「流しそめん大会」の様子。2本のビニール製配管を継ぎ合わせた種(と)の製作は、溶接隊員の協力を仰いだ ④ 首都での学習教室で教壇に立つ森さん。子どもたちは当初、ジブチの公用語であるフランス語で「数字」すら言えない状態であり、ゼロからのスタートだった

難民キャンプでの理科実験の普及

以上のように首都での学習教室の運営を進めるかたわら、森さんはジブチで活動する理科教育隊員たちとともに、難民キャンプの学校に「理

飽きるのも早い。そんな子どもたちを慣れないソマリ語でコントロールするのは至難の技だったのだ。そこで森さんが試みた策は、学習に「遊び」を取り入れること。「歌」や「カルタ」で言葉を学ぶ、あるいは「パズル」で図形について学ぶ、といった方法だ。すると、次第に子どもたちは勉強を楽しむようになり、落ち着いて授業を受ける子も見受けられるようになった。

難民の子どもたちとの付き合いが長くなるにつれ、彼らがいかに狭い世界の中での生活を余儀なくされているかが見えてくる。子どもたちが将来、人格形成をする際にベースとなるような「原体験」をひとつでも多くつくってあげることが、自分の役割だろう。そう考えるようになった森さんは、ときおり「行事」を行うようになった。難民の子どもたちが普段、足を踏み入れづらい「海」や「ショッピングモールの遊戯施設」などへの遠足、あるいは「流しそめん大会」などである。

に英語で説明し、Aさんがそれをソマリ語に訳して受講者に伝える」という方法で授業をスタートさせた。しかし、やがてAさんの欠席が増加。すると、「クラスコントロール」が大きな課題となっていた。教室の子どもたちは「学校生活」に慣れていないため、授業に



「理科実験」を広める活動にも取り組んだ。着任の前年、理科教育隊員たちが森さんの配属先の学習教室で理科実験を披露。それを見た配属先の同僚たちが、「難民キャンプでも理科実験を紹介してほしい」と依頼してきたのだった。キャンプ内の学校では従来、理科の授業は座学ばかりになっているとのことだった。

森さんたちが実際に取り組んだのは、理科実験のやり方を伝える研修を教員たちを相手に開くこと。着任の半年後とその1年後の2回、1カ所の難民キャンプで実現することができた。参加した教員は約40人。その大半はソマリ人難民で、研修は英語で行った。

1回目の研修の直前、キャンプには実はユニセフから寄贈された「理科実験キット」が倉庫に眠っていることが判明。そこで研修では、そのキットの使い方と、現地で入手可能な材料でできる実験とを紹介した。その後、隊員たちでキットの使用法を伝えるマニュアルを作成。2回目の研修はその解説を中心とした。このマニュアルによって理科実験のおもしろさに目覚め、その伝道師となる「ジブチの米村でんじろう」がキャンプの中に1人でも誕生してほしいというのが、隊員たちの願いだ。



CASE 3

難民支援

もりゆうき 森 勇樹さん (ジブチ・青少年活動・2016年度3次隊) の事例

「授業」に慣れない 難民の子どもたちを、 「遊びを通した学習」で刺激

学校に通うことができない難民の子どもたちを対象とする学習教室の運営に取り組んだ森さん。「学校生活」に慣れない子どもたちを相手にクラスコントロールすることに、当初手こずったが、「遊びを通した学習」で彼らの興味を引き出した。

森さんの配属先は、スイスに本部がある国際NGOのルーテル世界連盟。ジブチ国内の3カ所にある難民キャンプや首都で暮らす難民を対象にさまざまな支援事業を行っていたが、そのひとつが、首都の難民の子どもを対象とした学習教室の運営だ。森さんの着任当時、公立学校はジブチ国籍を持つ子どもしか通うことができなかった。難民キャンプには難民の子どもたちのための学校があったが、首都にはそれも無く、私立学校は学費が高い。そうして学校教育を受けられずにいる首都の難民の子どもにも教育の機会を提供していたのが、配属先の学習教室だった。

問題は、配属先の予算で参加児童の交通費を確保するのが難しい点。森さんの着任時、ソマリ人難民の職員(以下、Aさん)が教室運営の担当者にはなっていたが、実際は上層部の指示を待たざるを得ない状態、教室は中断したままになっていた。そうしたなかで森さんの最初の活動となったのは、教室を再開させることだった。

「立ちがだかかった「言語」の壁

ボーイスカウトに所属していた森さんは、そのなかで自身が受けてきたような「情操教育」を難民の子どもたちにも経験させてあげたいと

いう思いがあった。しかし、「協力隊活動は現地のニーズに沿うべき」との考えが強かったことから、まずはニーズの調査を実施。教室の受講者としてAさんが選定した5、10歳の子どもたち約40人の家庭を訪問し、子どもに何を学ばせたいかを保護者たちに尋ねた。すると、6割が「読み書き・算数」と回答した。

そうして、ジブチの公用語であるフランス語と算数を中心とする教室をスタートさせたのは、着任の約半年後。開講は週3回で、1回3時間。問題は「何語を使って教えるか」という点だった。首都の難民は約4割がエチオピア人で、教室の受講者として選定された子どもも大半がエチオピア人。エチオピア人の民族はさまざまだが、Aさんがソマリ人だったことから、どうしても「身内のよしみ」でソマリ人と同じソマリ族の子どもばかりとなっていた。森さん、Aさん、受講者が話せた言語は次のとおり。

「森さん」 日本語、英語、フランス語(派遣前訓練と現地語学習で学習)、ソマリ語(現地語学習訓練で学んだのみで、日常会話程度)

「Aさん」 ソマリ語(ソマリ人の公用語)、アラビア語(同)、英語

「受講者」 ソマリ語(一部は他言語も使用可能)

以上のような状況のなか、「森さんがAさん



森 勇樹さん

Profile

1989年生まれ、埼玉県出身。大学を卒業後、医科大学に事務職員として3年半勤務。17年1月、協力隊員としてジブチに赴任。19年1月に帰国。現在は、フランスの語学学校に短期留学中。

活動の概要

国際NGO「ルーテル世界連盟」に配属され、主に以下の活動に従事。
●首都で暮らす難民の子どもを対象とする学習教室の運営
●難民キャンプの学校の教員を対象とする理科実験の研修の実施(理科教育隊員との協働)

事例のポイント!

語学力不足は、授業のおもしろさでカバー!!

隊員が訓練で学んだ言語を担当授業の教え子が理解できず、クラスコントロールでつまづくケースもあるだろう。そうした状況の打開には、学習方法を興味を引くものにする工夫が鍵となる。

協力隊技術顧問が回答 活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

Q1

関係づくりの難しい子や自己評価の低い子にどう対応すればいいか

児童保護施設で活動する
青少年活動隊員より

施設で活動していますが、子供たちの喧嘩や子供からの暴言への対応をどうすればよいか困っています。関係づくりがとても難しいです。それから、もともと自己評価が低く、なかなかやる気を見せてくれない子供たちと一緒に活動するのに困っています。これまで行われてきた施設での活動内容もマンネリ化していて、施設の職員も子供たちの変化に対してあきらめがちです。子供たちの可能性を信じているのですが、なかなかそれがうまく引き出せていない気がします。ご助言をいただけると、うれしいです。

Answer

1、子供との関係性の見立て

まず、青少年活動で心がけなければならぬのは、子供たちとの関係性の見立てを常に怠らないことです。特に、活動開始時、非行少年や被虐待で傷ついた子供たちは、関わる隊員が本当に自分のことを親身になって考えてくれるかを試してることがあります。「**試し行動**」といいますが、わざとこちらを怒らせることを言ってきたり、いろいろなことを押し付けてきて、支配できるかどうかを試したりします。それらに感情的に反応して怒ってしまったら、**子供からの「支配・被支配」の関係に巻き込まれたりして**（あるいは、挑発されて）、子供に高圧的に出たりすると、子供たちからの信頼を失ってしまいます。子供たちの怒りや挑発、支配の背景には、**子供たちがこれまで生きてきた歴史性が反映されています**。その歴史に思いをはせる余裕があれば、挑発に乗ることもないし、怒りに任せて怒るといふこともありません。よくないことをした子供には、**そのことがどうしてよくないかを淡々と簡潔にわかりやすく言葉で伝えます**。

2、子供たちの自主性の尊重 ――隊員は前面に出ない――

青少年活動では、活動内容は常に、子

供たちの自主性を尊重し、**隊員は常に脇役に徹します**。主役は子供です。例えば、近隣の福祉施設、学校など他の施設でのボランティア活動も有効活用しながら、一緒に地域での活動を行っていくこともできます。

施設の子供が地域に出ていきつかけに、「近隣の高齢者施設訪問を子供たちが自ら企画すること」をした隊員もいました。この隊員は、**青少年の自主性を後押ししました**。施設に行く前にまず、高齢者についての勉強をし、高齢者へのイメージを子供たちに書いてもらいました。とてもネガティブなものでした。また、手作りの道具（インスタントシニア）で高齢者の体験もしてみました。そのあと、子供たちは老人ホームの下見と職員へのインタビューをし、そのうえで、訪問の企画をし、ダンスや歌の練習をして、実際に訪問をしました。その間、一貫して隊員は子供たちを見守りました。高齢者の方々は大変喜んでくださいました。子供たちも自分たちが人の役に立つたことがすごくうれしかったようです。当然子供たちの高齢者へのイメージも大きく変わり、また自分たちも生き生きとしてきました。施設長をはじめ、施設の職員の方々がたから、子供たちの変化をしっかりと評価していただきました。

Q2

アンケート実施に 関する注意点とは？

児童養護施設で活動する
青少年活動隊員より

子供たちと1年以上経過し、言葉も上達してきたことで、何人かの子供は、施設や職員についての不満や悩みを相談してくるようになりました。しかもその内容は、「他の子がいじめてくる」であったり、「職員が話を聞いてくれない」といったもので、多くの子が「他の職員にも相談したけど何も変わらないう」と言っています。子供の将来を思うと、やはり職員自体が変わらなければいけない部分も多くあると思っています。そこで、施設職員と施設入居者（子供）に対して施設の現状に関するアンケートを実施し、それをもとに職員・子供と話し合い、今後の活動の方針を作りたいたと考えています。ご助言をいただけると、うれしいです。

Answer

1、子供と施設との板挟み ――巻き込まれないために――

隊員共通の悩みですね。派遣先の職員の意識の低さや技術不足をどのように補ったり、伝えたりするか。ただ、（青少年活動での）ボランティアの立場では、（それぞれの国や施設の養育方針への）指導というところはなかなか難しいでしょう。あくまでも一緒に取り組む姿勢が必要です。難しい子どもへの対処に苦労しているのは、施設長も職員もボランティアも同じなので。危惧されるのは、予定されているアンケートで、特に子供向けは、子供たちの職員への不満を噴出させ、隊員が、子供と施設職員（当然、施設長も）との板挟みになる可能性が大きいということだと思います。その意味で、当然のことながら、施設長及び指導的立場の職員の了解を得ることが必要となります。慎重に対処すべきです。アンケートは事前に見てもらって、助言を受けたほうが良いです。そうでないと、施設長や職員と、隊員との関係が崩れる可能性があります。ボランティアの立場では、施設長が「ノー」と言ったことはできないですね。

2、子供たちの変化から 施設長や職員の意識を変える

ただ、子供たちの変化から施設長や職員
の意識を変えることはできません。考え

3、子供たちの変化をデータで示す

よい活動をされているので、自信をもって、「自身の活動を通して、「子供の変化」をしっかりとデータ（アンケート、写真、振り返りの自由記述等）で示すとよいですね。暴言を吐く子供や、暴力的な子供が叱ってどうにもなるものではないということに関わりの具体性の中での変化として、しっかりと示すことが必要です。例えばある子はスポーツをしているときは暴力的でなかった、とか。ボランティアとしてできることの限界性を認識しながら、できることを最大限模

4、支援者が結束してこそ、 子供たちの安心、安全、 そして、健やかな成長が実現

このような助言に対して、隊員から以下のお返事が届きました。「ご返信いただきありがとうございます。一緒に取り組む姿勢ですね。確かに、職員に直接関わることを避けて、子供に向き合っているつもりになっていたのかも知れません。職員の中には熱意を持って子供に関わりようとしている方もいるため、アンケートを通して、そういった方たちと今後を話していけば良いか話しあえるようにしたいと思っています。アンケートの内容と実施について、施設長や他の職員に相談してみます」。その後、隊員は子供たちとのことだけでなく、さらに、施設長や他の職員の協力をえながら、活動の成果をみんなで共有し、施設をあげての活動にしていくことで、自分がいなくなつた後でも、しっかりと残る「活動」へ意識的に大きく展開することができました。「隊員も含めた、支援者が結束してこそ、子供たちの安心、安全、そして、健やかな成長が実現する」。これが、青少年活動職種の真骨頂であり、醍醐味でもあります。

任期序盤の留意点

CASE 1 自己PR

そうまちはる
相馬千春さんの事例
(グアテマラ・美容師・
2016年度4次隊)

相馬さんが配属されたのは、職業訓練校の理容美容科。1年制の美容コースと6カ月制の理容コースがあり、約20人のクラスが前者には4つ、後者には1つ設けられていた。各クラスに教員が1人ずつ配置されており、相馬さんに求められていた活動は、彼らが行う授業のレベルアップを支援することだった。任期を通じて活動の柱となったのは、美容コースの各クラスの授業に入り、同僚たちが持たない技術を代わりに教えたり、彼らの技術の誤りを正したりすることだ。

「ダンス」と「ヘアスタイル」が奏功

任期の序盤、同僚や生徒との関係づくりで「上げなら自分でできる」と考え、ヘアスタイルを変えなかったのだ。グアテマラでも見かけないヘアスタイルだったが、意外だったのは、同僚や生徒たちは奇異の目で見るのではなく、「そのヘアスタイルはあなたが自分で考え出したの？」などと、興味津々で質問を投げかけてきたことだ。なかには、「先生と同じヘアスタイルにしたい」と言い出す生徒もいた。「良いチャンスだ」と考えた相馬さんは、右半分は相馬さんがカットし、左半分の刈り上げはほかの生徒に挑戦させてみた。すると、「私も」という生徒が続出。そうして一時期、相馬さんと同じヘアスタイルが美容コースの生徒たちの流行となり、同時に相馬さんと生徒たちの間の距離も一気に縮まったのだ。

「インターン」扱いをする同僚も

以上のように、同僚や生徒の多くとの関係づくりは良好に進めることができた相馬さんだったが、一部の同僚だけは関係づくりに着任の約1週間後、同僚(中央)が自宅での昼食に招いてくれたときの一枚。相馬さん(右)の当時のヘアスタイルは、左半分だけを刈り上げた奇抜なものだったが、これが同僚や生徒たちとの関係づくりに役立った

任期序盤の一枚



着任の約1週間後、同僚(中央)が自宅での昼食に招いてくれたときの一枚。相馬さん(右)の当時のヘアスタイルは、左半分だけを刈り上げた奇抜なものだったが、これが同僚や生徒たちとの関係づくりに役立った

語学力不足からの「だんまり」で「インターン」扱いをされるように

職業訓練校の理容美容科に配属された相馬さん。趣味の「ダンス」などが同僚や生徒との間の距離を縮めてくれたが、他方、語学力不足から会議で発言できなかったところ、「インターン」のように扱い始める同僚も現れてしまった。

現地のことを知る一方、現地の人たちに自分のことを知ってもらう——。そんな「お見合い」のような段階にある任期の序盤、後の活動を有意義なものにするためには、どのようなことに留意すべきなのか？ 事例を通して要点をピックアップする。



相馬さん基礎情報

PROFILE

1986年生まれ、東京都出身。美容学校を卒業後、美容室に約10年間勤務。2017年3月、協力隊員としてグアテマラに赴任。19年3月に帰国。

活動概要

非営利団体の「職業訓練校」が各地に置く職業訓練校のひとつ、ウエウエテナンゴ校(ウエウエテナンゴ県)の理容美容科に配属され、主に以下の活動に従事。

- 美容コースの授業のサポート
- 理容コースの授業のサポート
- 地域的美容院での技術指導

思いがけず威力を発揮したものが2つあった。そのひとつが「ダンス」だ。相馬さんは派遣前、中南米の国々でメジャーなフテンダンスである「サルサ」に熱中していた。そこからラテン文化に興味を持ったことが、協力隊への参加を志したきっかけでもあった。美容技術について語れることは、美容師隊員として派遣されている以上、当たり前のこと。同僚や生徒に自分への興味を持ってもらうためには、美容技術以外の得意技を見せることが有効だろう。そう考えた相馬さんは、任期の序盤、参加していた授業で生徒たちの集中力が途切れ始めたタイミングに、「ダンスタイム」の挿入を提案。すると、同僚たちもおもしろがって賛同し、音楽をかけながらも

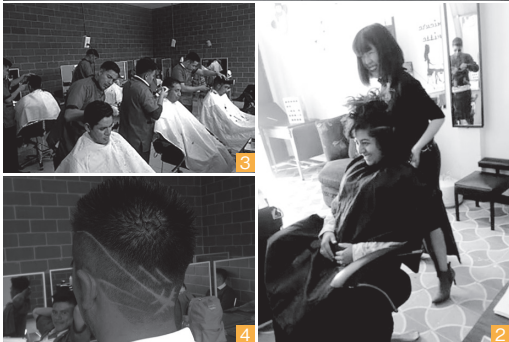
みんなでサルサを踊る「ダンスタイム」が実現した。すると、鍛えられた相馬さんのダンスに、同僚や生徒は驚嘆。彼らに相馬さんの存在を印象づけることができたのだ。同僚や生徒との関係づくりで威力を発揮したもうひとつのものは、相馬さんの着任時の「ヘアスタイル」だ。左半分だけを刈り上げるという、奇抜なものである。「現地の人たちの興味を引こう」という意図で選んだヘアスタイルではなかった。以前からインパクトがあるヘアスタイルを好んでおり、左半分だけを刈り上げるヘアスタイルは、派遣の3、4年前から続けていたもの。協力隊員として赴任する際、「現地の美容師にカットを任せてもうまくいかないかもしれない。刈り

おかしきことはすぐにわかったが、当初は角を立てずに断るだけのスペイン語力がなかったことから、しばらくは言われるままにデモンストレーションをこなしていった。

やがてスペイン語力が伸びてくると、相馬さんは勇気を出して、「これはあなたの授業なので、デモンストレーションはあなたがやるべきでしょう」と詰め寄った。しかし、いったん定着してしまった関係性は容易に変わらず、「あなたの技術を見たのだから」とはぐらかされるばかりだった。

「Aさんは私のことを『インターン』のような者だと見ているのだ。そう思い当たったのは、任期が後半に入ったころだ。グアテマラで活動する米・平和部隊の友人からこんな話を聞いたのがきっかけだった。

「グアテマラの人たちに『私はボランティアです』と自己紹介すると、『インターン』のように見られ、なめられてしまう。そのため平和部隊の者は、『私はエンジニアです』などと『職種』や『資格』で自己紹介するようになっていくのです」



- 1 相馬さん(左端)は、美容コースの新入生を対象にしたヘアセットの基礎を教える短期集中セミナーを担当。写真は、セミナーの最後にマネキンを使ったコンテストを行ったときのもの
- 2 相馬さん(右)は、配属校の卒業生たちが開いている美容院でも技術指導を実施。「集客力アップ」の秘訣などを伝えた
- 3 「カット」と「髭剃り」の指導ばかりになっていた理容コースでは、「ブロー」などほかの技術を教える短期集中セミナーを相馬さんが担当。写真は、セミナーの最後に実施したヘアスタイル・コンテストの様子
- 4 理容コースのヘアスタイル・コンテストの優勝作品

相馬さんの事例のPoint

語学力不足は「準備」でカバー

語学力に不安のある任期序盤は、どうしても「発言」を控えがちになってしまうもの。会議など、こぞぞという場面で自分をアピールするためには、事前に「台本」をつくるなどして、「発言」のチャンスを見逃さないことが重要だろう。

相馬さんは着任時、「私は日本から来たボランティアです」と自己紹介していた。そのうえ、会議でひとつも発言できない姿を見れば、「この子はインターンのようなものだろう」と捉える人がいるのも無理はなかった。語学力にまだ自信がない時期であっても、会議の議題を事前に聞き出し、あらかじめ自分の発言の台本をつくって会議に臨めば、「できる人だ」と印象づけられたはず。これが相馬さんの反省だ。



- 1 青少年センターで子どもたちを対象に行った「貯金」に関する啓発講習。ペットボトルで貯金箱を製作するなど、「貯金すること」へのモチベーションを高める工夫をした
- 2 小郷さん（右端）は週末に教会で空手指導も実施。その教え子たちにも「貯金」に関する啓発を行った
- 3 小郷さんが支援した協同組合が作る伝統工芸品を扱うようになったホテルの土産物コーナー

CASE 2 活動スタイルづくり

お 小郷智子さんの事例
(ルワンダ・コミュニティ開発・2016年度4次隊)

活動概要

- 東部ルワマガナ郡の郡庁に配属され、主に以下の活動に従事。
- 伝統工芸品の製造・販売に取り組み協同組合の支援
 - 「貯金」の習慣化を目的とした啓発の実施
 - 新規ビジネスの立ち上げ支援

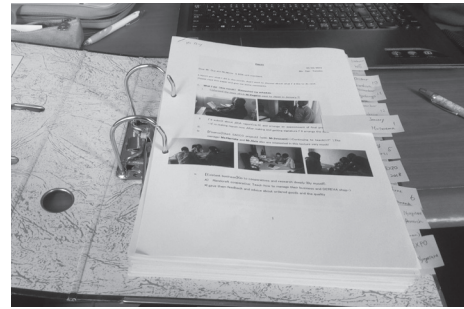


小郷さん基礎情報

PROFILE

大阪府出身。大学で開発学を、大学院で国際公共政策を学んだ後、(株)三菱東京UFJ銀行(現・(株)三菱UFJ銀行)に入行。2017年3月、協力隊員としてルワンダに赴任。19年3月に帰国。

任期序盤の一枚



小郷さんが任期序盤に導入した「月例報告書」のバインダー。当初は文章だけのものにしていて、配属先で扱われる報告書で「写真」が多用されていたことから、月例報告書もページ数を増やし、写真を掲載するようにした

配属先との関係を堅持する 「月例報告書」を導入

郡庁に配属され、住民による小規模ビジネスの支援に取り組んだ小郷さん。事務所外での作業が多い活動だったが、配属先に提出する「月例報告書」を早々に定着させ、カウンターパートとの良好な関係の維持につなげた。

「メモ書き」から「月例報告書」へ

小郷さんの着任時、ビジネス振興課の課長は空席となっており、課長補佐にあたる人が力

だ。文書はワードで作成したが、メールで電子データを送付したのでは見落とされ、おそれがあると考え、プリントアウトしたものを渡すようにした。さらに、「予定」の欄に書いたことを忘れたときに見返してもらえよう、月例報告書を綴じて保存するためのバインダーを用意。「提出した月例報告書にCPが目を通したら、既読のサインをもらい、小郷さん自身がバインダーに綴じて、決まった場所に仕舞う」というルーチンをつくった。

月例報告書はほかの同僚たちにも配布。また、着任して半年ほど経つと課長が着任したため、サインは課長にも行うようになった。

活動を進める「ルール」に

この月例報告書は、任期を通じて同僚たちと良い関係を保つベースとなった。

【信用】 小郷さんの活動は、事務所の外で住民ともに行う作業が大半を占めた。しかも、同僚はいつでも多忙であり、彼らに活動に同行してもらえないのは稀だった。そうして小郷さんの活動の「目撃者」が配属先にはないなか、「いつ、どこで、何をやったか」を伝える月例報告書は、小郷さんに対する同僚たちの「信用」につながった。結果、物産展への参加やJICAの隊員総会などで任地を離れる際などには、事細かに事情を説明せずとも、「トモコが行きたい」と言うのだから、きちんとした理由があるのだから」と言っ、すぐに出張申請書に「OK」のサインをもらうことができた。

【支援】 月例報告書の「予定」欄には、予定している活動に関して依頼したいことも記すようにした。たとえば、事務所外での活動で同僚の同行が必要なものには、「どなたかを推薦してほしい」などと太字で記載。すると課長は、

ワンターパート（以下、CP）となった。ところが、CPとコミュニケーションをとることが容易ではなかった。ルワンダの教育言語がフランス語から英語に切り替わった2009年以前に社会に出たCPが得意とするのは、ルワンダ語とフランス語。一方、小郷さんが派遣前訓練で学んだのは英語であり、ルワンダ語は現地語学訓練で少し学んだ程度だった。そうした「言語の壁」に加え、CPは多忙で席を空けていないことも多かったのだ。

光明を見出したのは、着任して2週間ほど経ったころ。CPにお願いして郡庁の資料を入手し、勉強のために読み込もうと思ったが、なかなか彼をつかまえることができなかった。そこで小郷さんは、「資料が欲しい」旨を英語で付箋に書き、CPの机に貼っておいた。すると、数日経つてようやく顔を合わせることできたときに、CPはすぐさまその資料を手渡してくれた。小郷さんがいないときに付箋の伝言を読み、用意しておいてくれたのだ。

「CPは紙に書いた伝言を無視することはなく、しかも、英語の文章を読むことができる」。そう知った小郷さんは、以後、CPに依頼したいことがあるときは、英語の「メモ書き」で伝えるようになった。

「メモ書き」の頻度が増え、煩雑になってきたことから、「月例報告書」というまとまった形の書類でCPとコミュニケーションをとるようになったのは、その後もまもなくのことだ。月例報告書に記載した内容は、その月に行った活動の「報告」と、翌月以降に行う活動の「予定」。分量は当初、「報告」と「予定」をそれぞれA4ページに収めた。ポリュームのある報告書では、英語が苦手なCPが目を通さなくなってしまう可能性があり、かつ、小郷さん自身も作成・提出を継続しづらくなると考えたから

可能な限り対応してくれるのだった。また、「JICA事務所の職員が配属先に行つて来る」など、課長に対応してもらうことが必要な行事についても記載するようにしたところ、課長がそれを見てスケジュールを調整してくれた。さらには、依頼事項を記載しなかった活動についても、課長は月例報告書の記載を見て、「この活動をするのなら、この人に知恵を借りるといいよ」と自発的にアドバイスをくれるようになった。

【リマインド】 月例報告書に記載した依頼は課長に忘れられてしまうことも少なくなかった。そのため、小郷さんは予定の活動を月例報告書で伝えた後も、口頭や「メモ書き」でリマインドすることを欠かさなかった。口頭でリマインドする際には、月例報告書のバインダーを取り出して、「ここに記しておいた件です」と説明。すると、「なるほど。私が見落とししていたのだね」と言っ、その予定を肝に銘じてくれるようになるのだった。

以上のように、小郷さんの活動にとって「ルール」とも言えるべき基盤となった月例報告書。バインダーにたまった書類の束は、任期終了時、そのまま小郷さんの活動を引き継ぐ人にとっての「引き継ぎ書」にもなった。

小郷さんの事例の Point

コミュニケーション手段が鍵

地域住民を対象とする活動が多いコミュニティ開発隊員などの場合、顔を合わせる時間の少ない配属先の同僚たちとの関係維持は、課題のひとつ。コミュニケーションの方法を早々に確立しておけば、後の活動がスムーズになる。

* 地域保健ボランティア…家庭を訪問しての啓発活動などを担当する地域保健スタッフ。ケニア全土に置かれている。

ケニアの地方行政区画は、47の「カウンティ」のもと、「サブカウンティ」「区」「村」へと分かれていく。八尋さんが配属されたウゲニヤ・サブカウンティ保健事務所は、約13万人の人口を抱える同サブカウンティの保健行政を所管する機関。求められていた活動は、地域の「栄養」に関する問題の解決を支援することだった。

八尋さんは派遣前、地域保健の事業を行う「市町村保健センター」で栄養士として働いたことがあった。その際、「地域保健の事業では、『疾病の罹患率』など、地域の保健に関する『統計データ』を踏まえることが重要」と叩き込まれた。そのため、協力隊員として赴任する際も、「まずは活動地域で保健に関する調査を行い、『統計データ』をまとめよう」と考えていた。ところが、赴任後に受けたJICAケニア事務所による研修のなかで、地域保健の活動についてこんな話を聞いた。「調査」から活動を始めた隊員は過去にもいる。しかし、調査結果を統計データにまとめたところで任期が終わってしまう、それを生かした活動はできなかった。もちろん、その統計データは配属先に活用してもらえない可能性はあるだろうから、それはそれで有益だとは思っ

八尋さんの事例の Point

「調査」は必要性の検討から

規模の大きなアンケート調査などをすれば、現地の実態をより正確に把握できる。しかし、協力隊員の任期には限りがある。着任したら、まずは既存のデータをよく調べ、本当に調査が必要かどうかを吟味することが有益だろう。

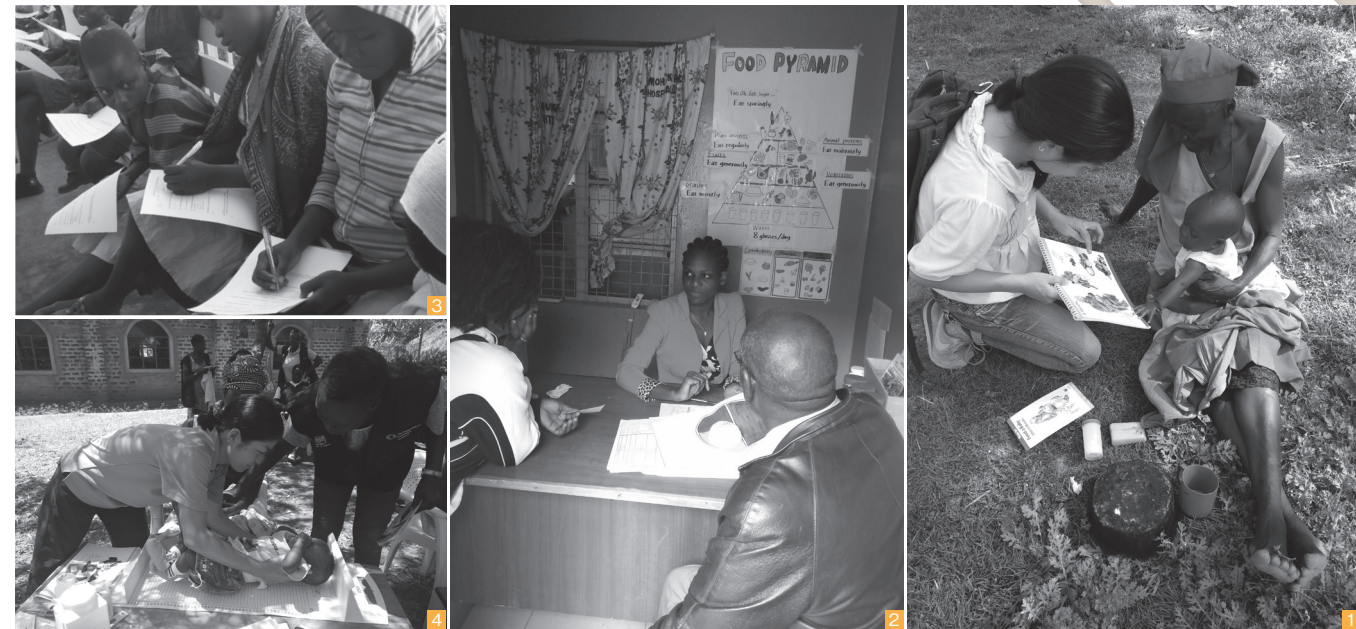
八尋さんはその後、より有益な統計データが栄養カウンセリングの記録簿から引き出せるよう、その記入方法について以下のような改善をAさんに提案した。

■「名前」の記入方法
ウゲニヤ・サブカウンティはルオ人が多い地域。彼らの名前は「本人のファーストネーム」「出生の時間帯を表すルオ人特有の名前」「父のファーストネーム」という3つで構成されるのが一般的だったが、Aさんは従来、最初の2つしか記入していなかった。しかし、最初の2つだけでは「同姓同名」の人が多いため、過去にカウンセリングを受けたことがある患者が来たときに、その患者の過去の記録を拾い出すことが困難となっていた。そこで八尋さんは、3つすべてを記入するよう、Aさんに提案した。

■「住んでいる場所」の記入方法
Aさんは従来、複数の「村」を含む「地域」の名称を記入していた。しかし、疾病の流行状況などは「村」単位で異なる可能性もあるため、「村名」まで書くことをAさんに提案した。

以上のような改善は、Aさんの業務を煩雑にするもの。しかし、統計データの有用性はAさんも実感していたことから、すぐさま実践してもらえようになったのだ。

- 1 栄養失調児の家庭を訪問し、養育者である祖母に離乳食と栄養について自作の教材で話をする八尋さん(左)
- 2 ウクワラ病院で栄養カウンセリングを行うAさん(奥)
- 3 栄養カウンセリングに連れて来られていない栄養失調児をあぶり出すために行ったアンケート調査
- 4 同僚たちが行う巡回診療に同行し、地域保健ボランティアに正しい身長測定の方法を説明する八尋さん(左)



八尋さんは統計データの作成を終えたと、その結果をAさんと配属先の所長に報告。すると所長から、ウゲニヤ・サブカウンティ全体の保健行政関係者が集まる月例会議で発表するよう求められた。診療所の所長や看護師など約30人が集まる会議だ。

八尋さんが紹介した統計データは、会議の参加者たちが初めて目にする種類のもの。「この地域は栄養状態の悪い人が多い」など、彼らがそれまで肌で感じていたことが数値に表れていたようで、「やはりそうだったのか」と関心を持って受け止められた。会議では、「栄養状態がきわめて悪い患者」の割合が多い世代については、地域保健ボランティアに重点的に家庭訪問をしてもらうべきだ」など、統計データを事業に反映する方法なども話し合われた。そうして会議の後には、統計データを踏まえた事業運営が実際にスタート。たとえば、定期的に行っている巡回診療は、統計データで患者数が多かった地域が優先されるようになった。

一方、八尋さん自身もその後の活動では統計データを活用した。たとえば、栄養カウンセリングに連れて来られていない栄養失調児のあぶり出しをするため、配属先の巡回診療に同行し、栄養状態について住民に尋ねるアンケート調査を実施したときのこと。その村の全住民を対象とすることは物理的に不可能であるため、対象を絞る必要があったが、その際に統計データを参照。栄養状態がきわめて悪い患者の割合が多かった「5歳未満児」の保護者だけを対象としたのだ。そうして、栄養カウンセリングに連れて来られたことのない栄養失調児を見つけることができ、配属先によるフォローへとつなげることが叶った。

「一から調査をするのではなく、まずは既存のデータを活用

地方の保健行政機関に配属された八尋さん。地域保健の事業は「統計データ」を踏まえることが重要だが、任期を有効に使うため、まずは既存のデータを調べ、それを活用する道を探ることにした。

八尋さんはこの話を踏まえ、一から調査を行うことは回避。任期序盤は、現地にすでに存在しているデータを調べ、それを最大限に活用する道を探ることにした。

栄養カウンセリングの記録簿

配属先の隣には、「ウクワラ病院」というサブカウンティの基幹病院があった。そこには栄養士がひとり置かれ、栄養状態に問題がある患者へのカウンセリングが行われていた。八尋さんの着任当時、配属先には栄養士が配属されていなかったことから、そのウクワラ病院の栄養士(以下、Aさん)が行うカウンセリングに同席させてもらいながら、地域の栄養に関する問題を学んでいくことにした。そのなかで目をつけたのが、カウンセリングの記録簿だ。カウンセリングを行うごとに、患者の名前、住んでいる場所、年齢、性別、身長、体重、カウンセリングを受けるのが初めてかどうか、栄養状態の悪さ(3段階評価)、体の状態(病気の有無・種類・症状)、家庭の食料事情(食料をどの程度入手できているか)などを記入していくものである。カウンセリング室には何冊もの記録簿が保管されていたが、ウクワラ病院も配属先もそれを活用してはいないとのことだった。

八尋さんがこの記録簿の内容を集計、分析し、統計データをつくろうと考えたのは、着任して半年ほど経ったころだ。対象範囲としては、それまでの半年間に行われた約500回のカウンセリング。記録簿に記載されている情報をエクセルファイルに入力し、「地域別患者数比」や「月別患者数比」、「栄養状態別患者数比(世代ごと)」などの統計データをまとめた。

CASE 3 課題発見

八尋さん基礎情報

PROFILE

1984年生まれ、長崎県出身。大学卒業後、短大で栄養士の免許を取得。栄養士として市町村保健センターなどに7年間勤務した後、2017年1月に協力隊員としてケニアに赴任。19年1月に帰国。



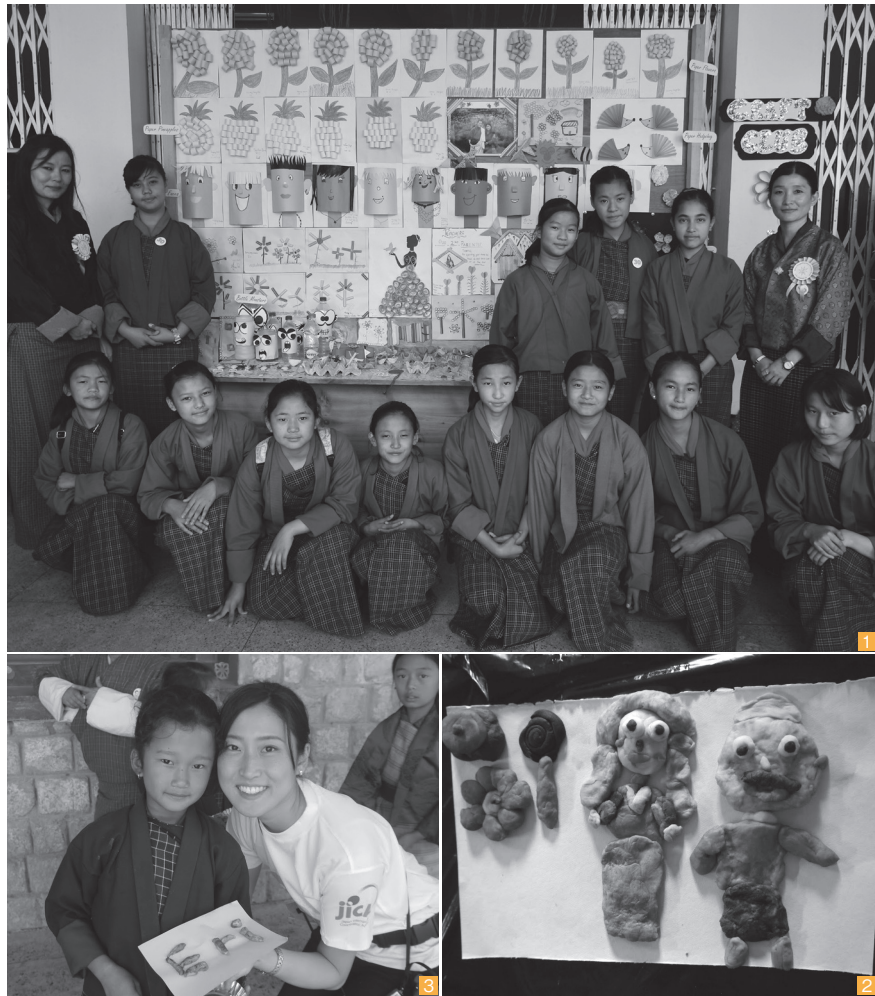
活動概要

- ウゲニヤ・サブカウンティ(シアヤ・カウンティ)の保健事務所に配属され、主に以下の活動に従事。
- 地域の栄養に関するデータの集計・分析
 - 栄養失調児の養育者への栄養に関する指導
 - 栄養に関する啓発教材の作成

任期序盤の一枚



現地の人々が消費している食材を知るため、着任直後から積極的に市場に通ったり、近所の人に料理をごちそうになったりした。任地は食材が豊富であり、栄養失調は養育者の食事のあげ方や病気などが原因となっていることが多かった



1 任期終盤に千葉さんが配属校で開いた美術作品の展示会。児童が授業でつくりためてきた作品を、クラスごとにまとめて展示した
2 地方の学校に赴いて行った美術授業のワークショップで、児童がつくった小麦粉粘土の作品
3 美術授業のワークショップを行った地方の学校の児童と千葉さん。小麦粉粘土で千葉さんの名前の作品をつくってくれた

配属先外での人脈づくりは 早々からすべきだったと後悔

小学校に配属され、美術教育の普及に取り組んだ千葉さん。「序盤から積極的に挑戦すべきだった」と後悔したのは、実りの多かった地方の小学校に赴いての活動だ。

プータンの小学校のカリキュラムに美術教育が導入されたのは2013年。国内にはまだ美術教員を養成する機関はなく、教育省による美術教育のワークショップを受講した小学校教員が美術授業を行い、それぞれの配属校の美術教育を推進する役割を担うこととなった。そうした教員は、多くの場合、ほかの教科の授業との掛け持ちだ。

地方出張の実現

千葉さんが配属された小学校でも、従来、美術授業は教育省のワークショップに参加したことのある教員が担当していたことだった。しかし、その教員もやはりほかの教科の授業を掛け持ちしているため、千葉さんの着任以降は校長の意向により、千葉さんが美術授業を一手に引き受けることとなった。

当初はクラス担任とのチームティーチングで美術授業を行い、彼らに技術を伝達していきこうと考へた。しかし、同僚たちは皆、多くの授業を抱えており、美術授業の負担が加わるのを快くは受け止めない。そうして「単独で授業を進めていくしかない」と千葉さんが腹を決めたの

は、着任して半年ほど経ったころだ。

千葉さんは着任当初から、サブの活動として「地方」の小学校でも美術教育の普及に取り組んでみたいと考えていた。地方の小学校は、材料の入手しやすさなど美術教育の環境が首都ほど恵まれておらず、支援の必要性がより高いだろうと考えたからだ。そうして任期の序盤から、校長に「地方の小学校に行ってみよう」と伝えてみるものの、なかなか認めてもらえなかった。プータンは主要都市の間に「峠」があり、地方に行くとなると、最低でも往復の移動だけで3、4日を要してしまう。そのため、千葉さんの1回の地方出張で美術授業に開く穴が大きかったのだ。

以後は遅ればせながら、配属校での活動に高いモチベーションを持って取り組むことができるようになった。

地方で出会った逸材

初めての地方出張で意義を実感した千葉さんは、その後、美術授業の普及に取り組むほかの小学校教育隊員たちとともに、地方で行う協働の活動を積極的に企画。結局、千葉さんは任期中に以下のような4回の地方出張が叶った。②と④の対象校は、かつて協力隊員が美

術教育の支援に取り組んだ小学校や、体育隊員の配属校、協力隊員が配属される予定の小学校などだ。

- ① 着任の約7カ月後：前述の地方出張。
- ② 着任の約8カ月後：ほかの小学校教育隊員たちとともに小学校2校を回り、各校の教員を対象とする美術教育のワークショップを実施。
- ③ 着任の約9カ月後：ほかの小学校教育隊員がその配属校で開催した、教え子たちの美術作品の展示会をサポート。
- ④ 着任の約20カ月後：ほかの小学校教育隊員

CASE 4

ネットワークづくり

ちばえり
千葉江里さんの事例
(プータン・小学校教育・2016年度3次隊)



千葉さん基礎情報

PROFILE
1993年生まれ、宮城県出身。共立女子大学でグラフィックデザインとプロダクトデザインを学び、中学校と高校の教員免許状(美術)を取得。2017年1月、協力隊員としてプータンに赴任。19年1月に帰国。

活動概要
ズイリオン・ナムゲリン小学校(ティンブー県ティンブー市)に配属され、主に以下の活動に従事。
●美術授業の実施
●美術クラブの運営
●他校における美術教育のワークショップの実施(他隊員との協働)

任期序盤の一枚



千葉さんが配属校で行った5年生の美術授業。人形劇の短編映画づくりに取り組んでいる。任期序盤は配属校での授業に力を注ぐ一方、「地方での美術教育の普及にも携わりたい」との思いを募らせていた

催。それをサポートすることが、千葉さんの出張の目的だった。展示会の日程が固まると、千葉さんは出張申請書を作成し、校長に提出。すると、校長は思いのほかスムーズに出張を認めてくれた。

校長が地方出張を認めてくれたのは、それまで全力で授業に取り組んできた千葉さんに、厚い信頼を寄せるようになったからだと考えられた。しかし千葉さんは、当初から校長に「協力隊員として、この国全体の美術教育のために貢献したい」という思いを明確に伝えることができていれば、もっと早くに地方出張を認めてもらうことができたかもしれないとの後悔も感じた。なぜなら、地方出張の実りが多かったからだ。最大の美りは、自分の配属校について客観的に評価できるようになったことだ。たとえば、「人材」についての評価。それまで千葉さんは、「同僚たちは美術教育に関心を持ってくれない」という不満を抱えていた。ところが、地方の小学校の教員と交流してみると、実は自分の配属校には教員としての資質が高い人たちが集まっているのだと実感できたのだ。同僚たちは、自分の責務に熱心であるがゆえに、専門外である美術教育へ中途半端に手を広げることがためらっているのだ。千葉さんはそう考えられるようになり、

たちとともに小学校4校を回り、各校の教員を対象とする美術教育のワークショップを実施。

「地方出張は、やはり任期のできるだけ早い時期に実現させるべきだった」。あらためてそう悔やんだのは、任期の最終盤に行った④の地方出張の際だ。任期中に千葉さんが出会った現地教員のうち、もっとも美術教育への熱意が強いと断言できるような人(以下、Aさん)が、このときの巡回先小学校にいたのだ。

千葉さんが着任して半年ほど経ったころ、プータンの美術教育のレベルアップを支援するJICAの「草の根技術協力事業」がスタート。その一環として日本で美術教育の研修を受けたプータンの小学校教員たちは、帰国後、日本で学んだことをほかの教員たちに伝えるワークショップを開くようになった。その受講者のひとりだったAさんは、ワークショップで学んだことをそのまま真似た授業を行うだけでなく、インターネットで情報を集めながら多様な工作課題を授業に取り入れたり、児童が授業でつくった作品の展示会を開いたりといった

千葉さんの事例のPoint

「出会い」は早めに

派遣国の将来を担うような人材が相手ならば、活動を共にしたり、技術を伝達したりする楽しさは格別だろう。そんな人材と少しでも長い時間を共有するためには、任期の序盤から出会いのチャンス積極的に探ることが必要だ。

形で発展させていたのだ。もし、任期の序盤にAさんと出会っていれば、SNSなどでやりとりをしながら、協働できることについて共にアイデアをふくらませ、実践していくことができただろうというのが、千葉さんの後悔だ。たとえば、プータンの美術教育について議論を交わす機会を設けたり、美術教育のワークショップを協働で開催したりすることも可能だっただろうと想像されるのだ。

2

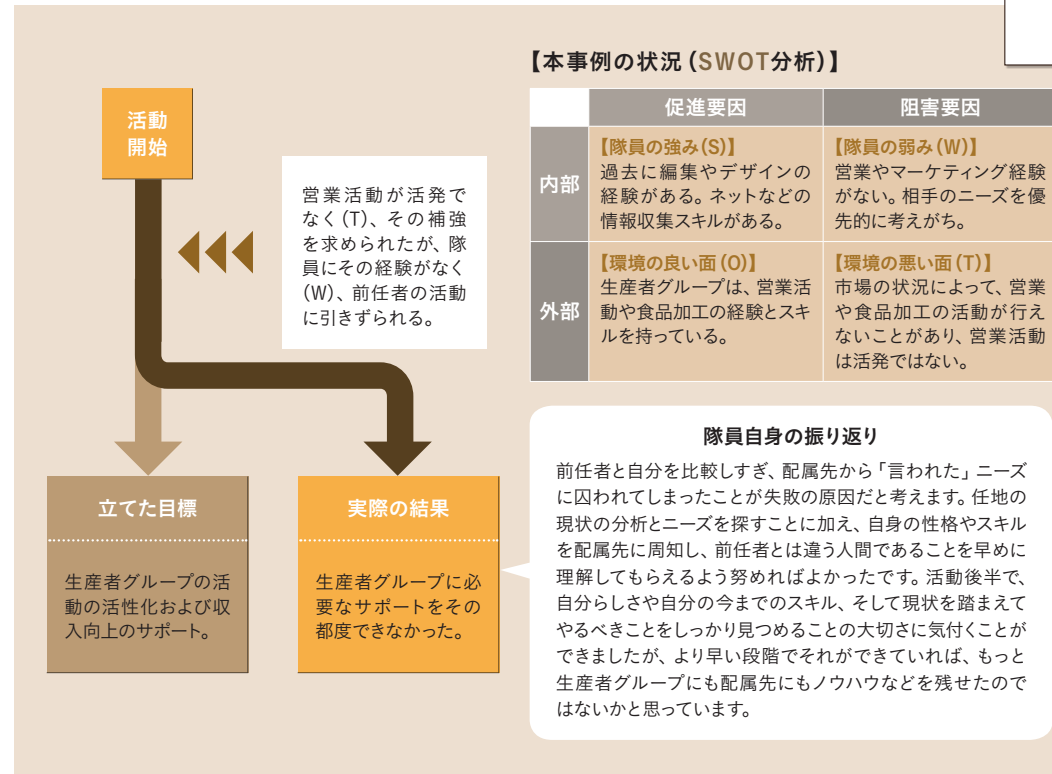
GOAL

START

“失敗”から 学ぶ #173



事例整理



他隊員の分析

積極的な自己開示を

自己分析のフレームワークに「Will-Can-Must」というものがあります。活動内容を決める際も「やりたいこと」「できること」「すべきこと」のバランスが大切だという認識があれば、今回のように相手の要望だけに囚われてしまうことを回避できたのではないかと思います。私も最初は初代隊員の活動を引き継ごうとするあまり早々に行き詰ってしまったのですが、活動に対する思い込みを捨て、自分の経験やスキルを積極的に周囲に開示するようにしたところ、新しいつながりやきっかけが生まれてより自分らしい活動を見つけることができました。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・コミュニティ開発・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

郡庁に配属され、羊毛製品の生産・販売を行う協同組合を対象とした、商品開発・生産管理・販路開拓などの支援と、少女を対象とした編み物教室の開催などを行う。

現状分析で自分の生かせる場を

前任者との比較は多くの隊員が直面する課題だと思えます。そこで重要なことは、現状分析を行い、自分のスキルや経験をどのように生かせるかを考え、異なる視点から課題にアプローチすることだと思います。私も4代目の隊員だったので配属先には前任者の影響が強く残っていました。私は特別なスキルはなかったので、まずは前任者の活動を引き継ぐことで状況把握に努めました。その中で私ができることを見出し、工夫することで、今まで前任者たちが築き上げてきた活動の継続性を保ちつつも、私なりの活動を行うことができました。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・コミュニティ開発・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

県庁生産局に配属され、食糧問題の解決、住民の収入向上を目指し、農家に適正な稲作技術の普及に取り組んだ。加えて、農家グループの組織化、マーケットの改善などを行い、持続的な稲作の発展に寄与した。

2代目隊員として、初代隊員と 比べられることによる活動の停滞

文＝トラン智美さん(東ティモール・コミュニティ開発・2016年度3次隊)

私は、2代目の隊員として、バウカウ県のコミュニティ開発センターというNGOに派遣されました。初代隊員の活動(営業活動とマーケティング分析)を引き継ぎながら、新しいことを始めてほしいというのが配属先のニーズでした。

しかし、前半の約1年間は、周囲から前任者の活動と比べられたことで、なかなか活動が軌道に乗らず、苦勞することは多かりました。前任者は、男性でひとりでもがつがつと営業を進めていくタイプの手法をとっており、配属先から「同じような形での活動をしてほしい」という風に行われることがしばしばありました。しかし、私は「隊員はあくまで伴走役、主体は女性グループの生産者たち」という気持ちを持っていました。また、支援しているグループの大半が前任者の指導による営業活動のノウハウはありつつも活動が活発でない状況であり、私は配属先による「積極的に営業活動を進め、販路拡大をする」というニーズに応える活動ができず、コミュニケーションをとることにも難しさを覚えていました。

ターニングポイントになったのは、赴任1年後に生産者グループと首都の特産

品フェアに参加したことでした。そこで、私は前職の経験を生かし、パンフレットなど商品の広報物を製作し、持参。生産者グループのメンバーをはじめ、カウンターパート(以下、CP)にもその広報物をほめられ、彼女たちもフェアでの販売活動にそれを活用してくれました。そのときにCPに、「智美にこんなスキルがあるなんて知らなかった、うちのNGOではこれを今つくれる人はいないから助かる」とありがたがられ、自分のスキルやできることを生かして配属先に提案するようにシフトしていきました。前任者のように自身で売れるシステムをつくって貢献するのはなく、CPを主体にして、各地のフェアにグループが参加できるよう促し、そこでスムーズに販売活動ができるようにサポートを行う活動をしました。

自分の性格として、主導するより周りと一緒にコミュニケーションをとってサポートする方が向いていることに活動の後半には気づき、周囲にも自分はそういう立場で活動をしていきたい旨を伝えました。すると、自分らしい活動というのが見えてきて、周りもそれに理解を示してくれ、活動が軌道に乗るようになりました。



特産品フェアで加工食品を販売する女性たち。トランさんは、ネットや本などを活用し、家で試作をして、身近にある手に入りやすい材料でつくれる商品を提案したり、品質に問題がある商品に対する改善策などを提示したりするなど、商品づくりから販売までを見守るような活動にシフトチェンジしていった



PROFILE

1988年生まれ、新潟県出身。2013年、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻修了後、明治図書出版株式会社に入社。小中学校向けの英語教材の編集を担当。退職し、17年1月、協力隊に参加。19年1月、帰国。その後、READYFOR株式会社にキュレーターとして就職。

活動概要

- 東ティモール・バウカウ県の女性食品生産者グループの活動の活性化及び収入向上を目指し、以下の活動を行う。
- 加工食品づくりの新商品開発と商品改善による収入向上支援
 - パンフレットやポスター、バナーなどの作成による広報活動 など

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#I103

福祉用具

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 24人

分類 ▶ 社会福祉

活動例 ▶ 福祉用具の製作、技術者への技術指導 など

類似職種 ▶ —

※人数は、2019年6月30日現在。



同僚に義肢器具製作のアドバイスを宮田さん(中央)。現在、世界には義足や装具を必要としている障害者が年間3500万人おり、義肢器具が提供できている数は5~15パーセントほどといわれている(WHO annual reportより)。2050年までには、義肢器具の需要は20億人を超えると推測され、慢性的な義肢器具や材料不足に対して患者が増え続けているのが義肢器具業界の実態だという

PROFILE

1990年生まれ、群馬県出身。2013年3月、新潟医療福祉大学リハビリテーション学部義肢器具自立支援学科を卒業後、義肢器具士として奈良県の奈良義肢株式会社に3年間勤務。16年7月、協力隊に参加。18年7月に帰国。同年8月より、タイのマヒドン大学医学部義肢器具学科修士課程に入学。現在は開発途上国向けにコストを抑え、かつ耐久性もあり、快適に使用できる義足の勉強中。

活動概要

国立リハビリテーションセンター義肢器具部門にて義肢器具製作、技術指導を行う。主な活動は以下のとおり。

- 患者さんの評価
- 義肢器具の採型、製作、適合、調整、修理
- 同僚への技術指導、知識共有
- 材料やパーツの管理、アドバイス
- 地方の障害者の地方巡回 など



話

みやたゆうすけ
宮田祐介さん

(東ティモール・2016年度1次隊)

#C105

バイオテクノロジー

派遣中 ▶ 2人

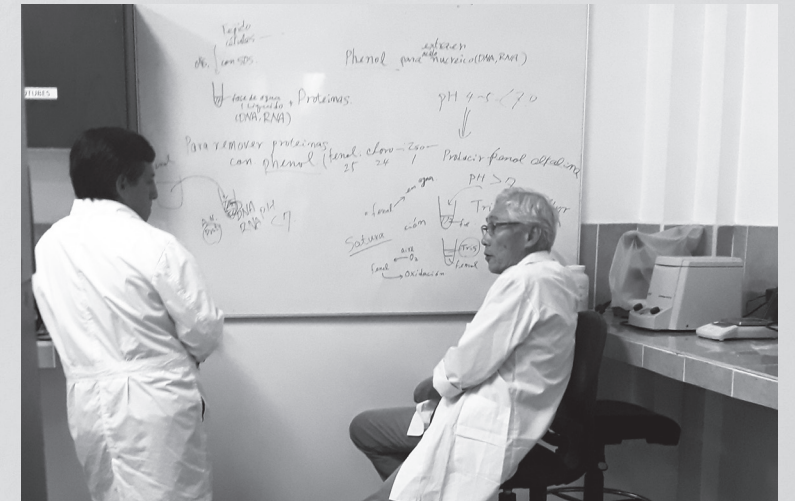
累計 ▶ 46人

分類 ▶ 農林水産

活動例 ▶ 組織培養技術による各種植物の種苗生産技術の向上 など

類似職種 ▶ —

※人数は、2019年6月30日現在。



CBTで、研究テーマについてCPと話し合う西川さん。西川さんは、配属先の研究プロジェクトを研究者と一緒に目的で活動に取り組んだが、「研究センターで研究者として生活するためや学生を指導する場合には自分の研究テーマを持っていた方が都合がよい」と感じたという。実際に研究テーマを持つことで、他の研究者と対等の立場で自分の研究も可能になり、学生の指導も無理なく実施できるようになったそうだ

PROFILE

1948年生まれ、長崎県出身。74年、鹿児島大学大学院農学研究科修士課程修了後、製薬メーカー入社。同社研究所に所属し、生化学的研究に従事。91年、関西医科大学微生物学講座入職。ウイルスの分子生物学的研究と実験・実習の指導に携わり、2011年6月定年退職。1996年、博士(医学)。退職後、SVとしてエクアドルの国立ロハ大学・バイオテクノロジーセンターに赴任(2011年度4次隊、2015年度1次隊)。18年7月帰国。

活動概要

国立ロハ大学・バイオテクノロジーセンター(CBT)にて以下の活動を行う。

- 同センターへの実験技術移転と研究者および学生の実験技術向上を目指した技術指導
- 研究計画および実験計画の作成と実験結果の整理・解釈および論文執筆の補助
- 新規研究プロジェクト獲得のための申請書作成



話

にしかわまさお
西川正雄さん

(SV・エクアドル・2015年度1次隊)

*1 CBT…バイオテクノロジーセンター、Centro de Biotecnologia.

Q メインの活動は？

赴任した国立ロハ大学・バイオテクノロジーセンターは、研究に特化された施設であるため学部学生は在籍しない。その研究体制は概ね以下の様であった。同大学内に公表された研究プロジェクトの中から学生が興味を持ったものを選び、プロジェクトリーダーの下に集まって来る。学生の多くは自然科学的な実験に携わるのは初めてである。プロジェクトのリーダー(隊員のカウンターパート(以下、CP)でもある)は、1、2人のテクニシャンと共に集まった学生を指導しつつ彼らの協力を得て自分の研究を遂行する。このようなかで隊員はCPに対しては研究の円滑な進展のための助言者であり技術的な指導者であると同時に、学生に対しても指導的役割を担う。従って、実際の活動は実験計画・手順の立案、実験の原理・目的・意義を解説するセミナーの開催、模範的な実験の実施、得られた実験結果の収集・整理・論文作成などであった。

Q 活動の最大の困難は？

研究プロジェクトの研究期間は、2年間のものが多い。現地の申請から隊員派遣まで約1年を要し、隊員は任期前半1年でプロジェクトが終了してしまう。私の場合、赴任時には要請書記載の研究プロジェクトはほぼ終了し、CPも数カ月後に異動することが

Q メインの活動は？

主な活動は患者さんに義足や装具の提供をすることです。日本とは異なる材料や製作法のため、自分がそれに慣れるよう、最初の1年は患者さんを多く見ることが意識していました。同僚の仕事(型取りから納品)は非常にのんびりしていたので、回転率を倍以上にし、それを習慣化させることを目指しました。私がかつとに休憩時間を削り、仕事をやる姿勢を見せること1年、同僚も少しずつペースを合わせてくれるようになりました。2年目からは、私の責任で見ていた患者さんを少しずつ同僚に担当させ、専門職として患者さんを担当する責任を感じてもらいました。その方が私の帰国後、患者さんに迷惑がからないと考えたからです。

Q 活動の最大の困難は？

東ティモールには30以上の言語があり、言葉によるコミュニケーションを取るのが困難な患者さんに会うことがあります。交通事故によって脚を切断した4歳の女の子を担当したとき、瘦せていて肉の少ない脚に義足を適合させることは難しいうえ、言葉が通じず、さらに女の子の父親は伝統医療を信じていました。義足の使用により再び歩けるようになること、でも女の子が義足をつけて日常生活を送るには家族のサポートが必要なことなどを伝え、納得してもらったことには苦労しました。

決定していた。着任後すぐに研究プロジェクトとCPを探る必要があった。

Q どう対応しましたか？

幸い、同センターは全員で20人程度と組織としては比較的小さく、赴任2カ月で各研究者と自由にコンタクトを取れるようになり、それぞれの専門分野や持っている研究プロジェクトを把握することができた。その際にコンタクトしたプロジェクトリーダーの研究に自然に加わることができた。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

私は指導的な立場で赴任しましたが、最初は学位を持つ研究者からテクニシャンに至るまで、彼らの信頼を勝ち取ることに努めました。そのためには努力をいとわず、率先して体を動かしました。ある意味体力勝負の一面もありましたが、一度信頼を得られれば、あとは比較的スムーズに進み、多少の無理も利くようになりました。

また、研究分野に限らないと思いますが、「インヘニエロ(技師)」をCPとして活動する場合、彼らのプライドを尊重することが重要です。インヘニエロはその分野の専門家としての地位が世間に認められた人であり、その知識や技術に自信を持っている人たちです。一度行き違いがあると中々元に戻らず、相当の努力を要します。

Q どう乗り越えましたか？

このケースに限らず、物事を考えるときは常に最低5パターン以上のアイデアを持つように心がけています。義足の合わせ方、コミュニケーションの取り方、説明方法、誰に協力を頼むかなど、さまざまなケースを想定しておくことで、解決の可能性をより広げることができると思います。できれば多くの人を巻き込み一枚岩で対応することも大切です。そして、その場の状況を冷静に分析して複数の選択肢から最適だと思われる方法を試みます。さらに大切なことは、試した結果の良さ悪しにかかわらず反省し、次に生かすこと。その積み重ねが何よりも大事だと思います。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

開発途上国では国際赤十字や現地産、中国製の材料や部品を使用していることが多いです。そのため、どうしても限られた環境で義肢器具の快適性を向上させることができるのか、より創意工夫が求められます。また、日本のように四季がない国も多いため、その国の気候を考慮して製作する必要もあります。しかし、そういった環境で活動をする上で、さまざまな角度からものごとを考える能力や柔軟な発想は鍛えられると思います。それらの経験は任期を終えてからの今後のキャリアにもきっと役立つと思います。

*2 テクニシャン…実験の補助をする人。自身で研究テーマなどは持たない。

矢崎エナジーシステム株式会社 設立年月日：1963年8月21日 本社所在地：東京都港区三田1-4-28 事業内容：電線事業、ガス機器事業、環境システム事業、計装事業 従業員数：2076人(2018年6月現在) URL：https://www.yazaki-group.com/	2014	2013	2011	2008	1986
	4月、矢崎エナジーシステム株式会社に入社② 管理室企画部に所属し、社内の新規事業の活性化を先導し、新規プロジェクト推進役を担う。	7月、帰国。	6月、青年海外協力隊に参加。 マラウイのントウンボ中高等学校にて、生物を中心とした教科指導と、授業のサポート、担当地域内で実験器具の使用法の伝授や、実験器具の管理運営方法の整備などを行った。	3月、大学の農学部を卒業後、金融機関にて法人営業を担当①	愛知県出身。

選択の理由

矢崎グループの社是は「世界とともにある企業」「社会から必要とされる企業」。また、挑戦する従業員を会社としてサポートしてくれる社風など、同社で働くことが自身のやりたいことの実現につながると感じ、入社。

選択の理由

活動していたNGOが資金不足で解散したことで、世間の荒波に揉まれ、物事をシビアに見つめる視点が大切だと思い、お金の勉強をしようと金融機関に就職。

事業企画の担当に

1 就職

2 協力隊に参加



before ▶ after 人生を変えた2年間

before
金融機関 法人営業

after
エネルギー総合プロデュース企業 企画担当



プロジェクトのために、市場調査を実施する平塚さん。現場の声を聞いて、そこから課題や解決策と一緒に考えていく過程は協力隊の活動と似ており、その経験は現在の事業を動かすうえで役立っていると感じている

幼い頃から自然や動物が好きだった。声を上げることのできない弱い立場を守りたいという思いから、彼らの声なき声に耳を傾けるようになり、それがいつしか自分では困難を伝えられない人の役に立ちたいという思いに育っていった。その思いは、現在、開発途上国の課題を解決する事業の創出につながっている。

恵まれた環境で不足していたもの

「普通な家庭で、不自由なく育った」という平塚さんは、高校生の頃、自分と同年代で恵まれない環境にいる途上国の人たちのことを知り、彼らの役に立ちたいと思った。そんなとき、協力隊のポスターを見て参加を考えたという。元国連関係者が教授を務める大学の農学部に進学して環境管理や国際協力政策について学び、研修で行ったタイの大学で現地の生活を向上する活動に携わった。プライベートでは、動物保護活動をするNGOで活動していたが、ある日、団体が資金不足で解散する。「団体の人は人が良過ぎたのかも」と振り返り、金銭面をシビアに捉えないと良い活動でも続けられないことが身に染み。その経験から大学卒業後は金融機関に就職。



マラウイで生徒の質問に答える平塚さん。自宅が学校の近くだったため、よく生徒が訪問した。周りには、毎日遊びに来る好奇心旺盛な子どもたち

成功するまで挑戦する

マラウイ・理数科教師・2011年度1次隊
平塚 千都さん

100パーセントの力で

帰国した平塚さんは、BOP層に向けた事業を行う企業や団体を探し、NGOやコンサルティンク企業を訪問したり、BOP関連事業の説明会やJICAの企業向け帰国報告会に参加したりした。そこで出会ったのが矢崎グループだ。自動車部品の製造・販売などを行う同社は、社会貢献活動に注力しており、人を大事にする企業であることに加え、途上国に多くの拠点を構えている。平塚さんは同社に自分のやりたいことが実現できる未来を見た。職種も業種も未経験だったが、「何事もまず挑戦」という姿勢で応募した。

現在は、矢崎エナジーシステム株式会社に所属し、新規事業の企画と社内の新規事業創出の仕組みづくりをしている。特に力を入れているのは、新規事業の企画だ。平塚さんは、BOP層を対象にした途上国の社会課題を解決する事業を創出するプロジェクトを立案。現在そのプロジェクトは事業企画の段階は終え、ビジネスモデルの各パーツで実証実験を実施し、実現性を図っている段階だ。商品やサービスは量産レベルまで進んでおり、事業スタートに向け、関係者との契約を整えている。社内外で同事業に賛同してくれるメンバーは20人を超え、知恵を寄せ合って進んでいる状況だ。関係者の人数が多く、海外での活動のため、プロジェクトマネジメントの苦労は絶えない。それでも協力隊時代に、インフラが整わない環境で数々のトラブルに見舞われ、それらを乗り越えた経験があるから「困難にはめげないし、粘り強くなった」という。「前職では余裕のある範囲で仕事をしていたような気がします。目一杯頑張ることがダサいと感じていたのかな。今は100パーセントやり切った方が、仕事も人生も楽しくて明るいものになると思っています」

日々悩み、勉強しながら一歩ずつ歩を重ねる平塚さん。「失敗しても成功するまで挑戦する」とその想いを語る。

「今回の新規BOP事業で、困っている方に商品・サービスを届けるため奮闘しています。すでに仕事の域を超えてライフワークとなっている感覚ですが、仕事としてしっかり結果を出し、チャレンジできる環境をくれた会社にも還元したい。誰かの役に立つのなら、てをかえしなをかえ今の事業形態だけに固執せず、目的を達成させるため挑戦し続けたい」

実際に事業スタートするのは来年。ゴールの向こう側に見える人の幸せのために、今日も100パーセントの力で走る。



- *1 ソーシャルワーカー…社会生活上の課題を抱える人を支援するために、本人からの相談に応じたり、福祉サービスの提供機関に働きかけたりする業務（ソーシャルワーク）を担う職。
- *2 社会福祉士…「社会福祉士及び介護福祉士法」に基づき、ソーシャルワークの専門性が認定された人に与えられる国家資格。
- *3 精神保健福祉士…「精神保健福祉士法」に基づき、精神障害者に対するソーシャルワークの専門性が認定された人に与えられる国家資格。
- *4 SDGs…「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略。2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、持続可能な世界を実現するための国際目標。

識して事業を進めていこうという流れにあるのですが、それを実践するためには、各国の自治体が行っている取り組みなどにも目を向けながら、SDGsについての理解を深め、SDGsに含まれるひとつひとつの目標を地域住民の生活の中に具体的に落とし込んでいく作業が必要となります。しかし、そうした課題意識を共有できる同僚がなかなか見つかりません。私も現在の職場に就職した当初は、先輩職員から「協力隊に参加する決断をしたなんてすごいね」と言われるなど、「色物扱い」をされていると感じていたこともあり、「外」に目を向けようなどと言いますが、就職の1年後に私と同じ特別枠で協力隊経験者が採用されたのですが、やはり彼らとは話が合う。そうして彼らとともに、「外」に目を向けること」を目指した勉強会を有志の同僚たちとともに立ち上げようということになり、現在はその準備を進めているところです。

A 協力隊を経験した仲間が職場にいるのでもないのとは、違うのかもしれないですね。私の職場には協力隊経験者がおらず、協力隊経験で感じたことを誰とも共有できないため、ときどき心が折れそうになります。

B 「外」に目を向ける」という点は、教職でも課題となっています。学校というのは子どもたちが「社会に出るための準備」をする場ですが、学校以外の社会を経験したことがない教員も多いという現状があります。私が協力隊に参加したのも、国語の教科書に「南北格差」をテーマにした文章が出てくるのに、私自身が途上国の社会課題を実感できていないのはいかなるものかと思ったりすることがあります。この点について、私はAさんのように、同じ任地で活動する他国のボランティアたちとの出会いで学べたことがありました。ドイツ人のボ

「座談会参加者」



Aさん(女性)

【派遣前】
会社員(事務職)
【協力隊】
▶退職参加
▶青少年活動・アジア・2013年度派遣
▶小・中学生の日本語授業の運営などに従事
【現在】
障害者支援施設に勤務

Bさん(男性)

【派遣前】
高校の国語科教員
【協力隊】
▶現職参加
▶青少年活動・アジア・2014年度派遣
▶中等学校の日本語授業の運営などに従事
【現在】
高校に復職

Cさん(女性)

【派遣前】
英会話講師など
【協力隊】
▶退職参加
▶青少年活動・大洋州・2014年度派遣
▶子育てに関する啓発プログラムの従事
【現在】
地方自治体に勤務

理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第⑧回 青少年活動篇

帰国後のあゆみ

A 私は病院の精神科のソーシャルワーカーを少し経験した後、民間企業の事務職を経て協力隊に参加しています。日本語教師の資格を持っていたこともあり、協力隊は「日本語の授業を行う」という要請内容の案件で派遣され、現地の先生が行う小・中学生の日本語授業のサポートなどに取り組みました。帰国した年に今の勤務先である障害者支援施設に就職し、現在はソーシャルワーカーとして精神障害者の就労支援に携わっています。勤務のかたわら、専門学校の通信教育で社会福祉士の資格を取り、現在も精神保健福祉士の資格を取るために専門学校の通信教育で学んでいます。

B 私の派遣前の仕事は公立高校の国語科教員で、協力隊は現職教員特別参加制度による派遣です。協力隊時代はAさんと同様、中等学校で日本語の授業を担当しました。帰国後は、派遣前に勤務していたとは違う高校に復職し、現在に至ります。

C 私は英会話講師やゲストハウスのスタッフなどを経験した後に協力隊に参加しています。「青少年活動」の職種ではありませんが、実際の活動は子どもに直接かかわるものではなく、地域の若い母親を対象に子育てに関する啓発を行うプログラムを支援することでした。そうした活動を通して、「地域」の中に入り込んで行う仕事は楽しいと感じたことから、帰国後の進路には地方自治体を選びました。海外経験者などを対象とした社会人の特別枠での採用です。就職してからこれまで、観光と国際交流を所管する部署に配属され、主に姉妹都市交流や海外からの視察団の対応などに携わってきました。

「内向き」という課題

A 協力隊時代、私の任地では米国人のソーシャルワーカーがボランティアとして地域の子どもの情操教育などを行うプロジェクトに取り組んでいました。私はよく、そのお手伝いをしたのですが、彼女と付き合うなかで、米国と日本ではソーシャルワーカーの社会的地位が随分異なるということを知りました。米国では修士号を持つていなければソーシャルワーカーになることはできず、高い専門性を要する業務を行うがゆえに、給料も日本より高い水準にある。ソーシャルワークは社会生活上の課題を抱える方を支援する仕事ですから、そのあり方は社会の変化に応じて変わっていくべきものであり、そのためにはソーシャルワーカーが海外のソーシャルワーカーについても知っておくことは重要なはずですが、しかし、今の職場にいる先輩ソーシャルワーカーの方々の会話には、「外」に目を向けるような話はなかなか出てきません。かと言って、ソーシャルワーカーは経験年数が重視される世界ですので、私のような新米が「海外のソーシャルワーカーのあり方」に目を向け、そこから何かを学びましょう」などと発信することはためらわれる。社会福祉に関する法令は毎年のように改正されるため、それを把握するために日々、勉強を重ねていかなければならず、ソーシャルワーカーは「外」に目を向ける余裕を持ちづらいという事情もあります。

C 私も、今の職場について「内向き」の傾向が強いと感じています。「庁内での調整業務」が非常に多く、「地域住民」や「よその地域」さらには「海外」などどうしても目が向きづらい。現在、自治体も「SDGs」を意

B 現在、教員について「教えるプロ」から「学びのプロへ」と言われることがありますが、教員はすでに知っていることを伝えるだけでなく、「知らないことを学ぶ経験」を自身で積み、それを伝えるべきだという考えです。私にとって協力隊はまさに「学ぶ経験」を積み場でもありました。今、私が学ぼうと考えているのは「転職」です。日本でも「転職を踏まえたキャリア形成」が当たり前になってきているなか、それについて子どもたちに説得力を持つて語るためには、自分が知ることが必要だと思ったりします。実際、情報収集のために転職説明会に足を運んだりもしているのですが、一方で、教員の管理職試験の準備もしています。Cは、今後も重ねていきたいと考えています。

ランディアだったのですが、彼らは小学校を回ってさまざまなアクティビティを提供する活動を行っていました。私もその活動に参加させていただくことがあったのですが、その経験を通じて実感したのは、学校が学外の方々の力を借りることの重要性です。教員が学校以外の社会を経験していないのなら、学外の方々に学校の運営についてアドバイスをいただいたり、子どもたちが社会を知る機会を与えていただければ良いわけです。

幸い、日本では各校の教員がより良い教育のあり方について話し合うさまざまな研究会が設けられており、私は配属校がある県の「国際理解教育」をテーマにした研究会で、「学校が地域とつながることの重要性」について、協力隊経験者や先輩教員がネットワークをつくることで、研鑽を積んだり、社会になんらかの働きかけをしたりすることが容易になるだろうと考えることができました。もちろん、同じ「協力隊経験者」と言っても、考えや価値観には違いがありますから、広く緩くつながりながら、協力してできることを見つけ出していくという姿勢が重要だろうと考えています。

今後のビジョン

A 今後、私は障害者支援分野のソーシャルワーカーとしての専門性を深めていこうとは思っていますが、一方で、やはり海外で暮らした経験を生かせる仕事をしたいという思

生活に役立つ技



あるもので思い出の味

ナビゲーター = 井上由子さん
(ホンジュラス・看護師・2015年度3次隊)

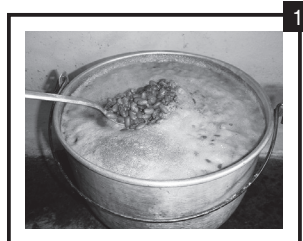
ピロンDEミルク金時(ミルク金時アイス)

ホンジュラスには、「ピロン」という、棒状のアイスがあります。任地には大きなスーパーはなく、おやつは砂糖たっぷり、コレステロールの高いスナック菓子などが主流で、あまり家庭でおやつをつくる習慣はありませんでした。中南米ではフリーホーレス(インゲン豆の一種、小豆と似ている)が毎日のように食事に含まれますが、塩などで味付けされたものがほとんどで、「小豆=甘い」という概念の日本人には意外でした。同様に、ホンジュラス人には「フリーホーレスを甘くするなんて!」という一種の衝撃があるようです。物がたくさんはないからこそ、健康的にいろんな食べ方を楽しんでもらいたくて、「ピロンDEミルク金時」をつくりました。大した料理ではないのですが、簡単で日本の昔ながらのアイスの紹介にもなりましたし、何より固定概念の違いとそれを考えることの難しさも感じました。

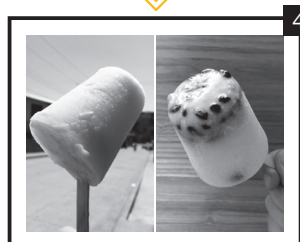
- 【材料(4個分)】**
- フリーホーレス(黒インゲン豆、レッドキドニービーンズなど) …100g
 - 水 …250ml(豆によって調整)
 - 砂糖 …全部で大きじ4
 - コンデンスミルク …60ml(大きじ4)
 - 牛乳 …800ml
 - 容量250ml程度のプラスチックコップ …4個
 - 木の棒 …4本



③砂糖大きじ2を混ぜた牛乳をカップの3分の2程度のところまで入れ、木の棒を入れる。



①フリーホーレスを水(分量外)にひと晩ひたす。ひたした水を捨て、水、砂糖大きじ2を鍋に入れ、柔らかくなるまで煮る。



④冷凍庫で冷やして固まったら出来上がり。現地の方は、最初不審がりがながらも食べてくれ、「おいしい」と「やっぱり無理」と言う人の二手に分かれた(笑)



②①を冷凍庫で冷やしたのち、プラスチックのコップに適量入れる。その上にコンデンスミルクを1カップにつき15ml(大きじ1)入れる。

知ったク情報



筋トレで健康に!

ナビゲーター = 山村昂平さん
(ジンバブエ・陸上競技・2016年度3次隊)
アスレチックトレーナー

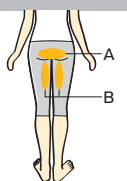
だいでんきん 大臀筋ストレッチとヒップリフト

今号から4回連続で、筋トレとストレッチを紹介していきます。筋トレなどを行うメリットは、場所・時間・道具を必要とせず、運動量を確保できることです。運動を行わないと関節や腱が硬くなり怪我などにつながることもあるので、紹介する運動を日常に取り入れてみてはいかがでしょうか。

大臀筋ストレッチ→ヒップリフト(10回×3セット)

この筋肉にきく!

- A.大臀筋…お尻のメインの筋肉で、歩行や走る動作などすべての日常動作に関係する。
 - B.大腿二頭筋(だいたいにとうきん)…歩行や走る動作などの日常動作に関係。硬くなると腰痛の原因に。
- ※痛みや違和感がでる場合には中止してください



ポイント ①四つん這いになり片方の膝を約90度曲げる。②肘を肩の下あたりにつき骨盤を前傾させる。③伸ばしている方の膝を少し曲げておく。 [30秒交互に1セット]



ポイント ①膝は肩幅に開く。 [2秒で上げ、上で2秒キープ、2秒で降ろす、10回3セット]



ポイント ①腰は反りすぎないように。②お尻にエクボができるくらい力を入れる。③太ももの前がストレッチしている。

活動に役立つアイデア



好きな布でエコバッグをつくろう! ②

ナビゲーター = 田原 彩さん(エジプト・手芸・2017年度1次隊)

リバーシブルエコバッグのつくり方

前号で紹介したエコバッグの応用編で、今回はリバーシブルのエコバッグです。ポケットに本体を収納するとバッグの内側に使った布が表に来るので、使用時と収納時は違った雰囲気を楽しめます。工程は前号と同様に、①仕上がり線を引いた布をカットする②持ち手をつくる③ポケットをつくる④本体をつくり、持ち手とポケットを付けたら4工程で単純です。持ち手をひっくり返す道具「ループ返し」の代用品と、ミシンでまっすぐ縫うコツもご紹介します。



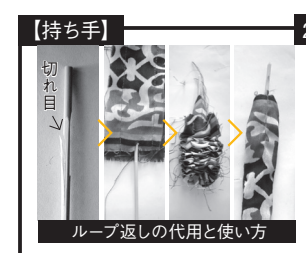
手とポケットを付けたら4工程で単純です。持ち手をひっくり返す道具「ループ返し」の代用品と、ミシンでまっすぐ縫うコツもご紹介します。

【用意するもの】(バッグの仕上がりサイズ: タテ38cm×ヨコ45cm(持ち手55cm)程度)

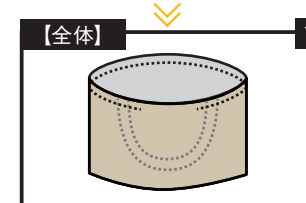
- 布…タテ80cm×ヨコ80cm程度を2枚
- 糸
- ミシン(なければ手縫い用の針)
- はさみ
- 定規
- 線を引くチャコ(鉛筆や石鹸でも可能)
- ループ返し(持ち手作成で使用。なければ代用品でも可能)
- マチ針



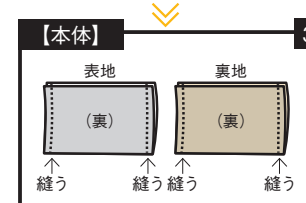
⑥表地を、⑤の裏地の中に入れる。



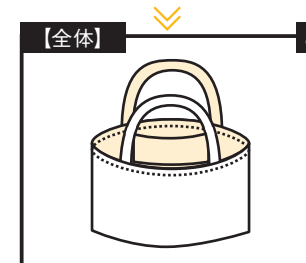
②【持ち手】をつくる。表地と裏地を内側に重ね、仕上がり線をミシンで縫い、表に返す(2本)。ひっくり返す道具がないときは、竹串や割り箸のような棒に切れ目を入れて代用。棒に入れた切れ目に布を挟みどんどん押し込みとひっくり返すことができる。



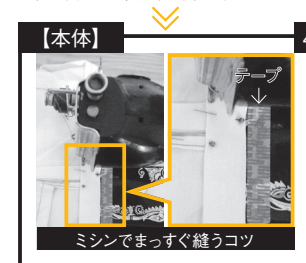
⑦ひっくり返す口を5cm開け(ポケットの反対側、持ち手の間)、袋口を1周ミシンで縫い、ひっくり返す。



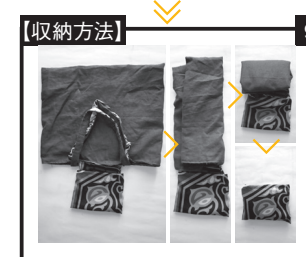
③【本体】を縫う。表面を内側にして両脇を縫う。表地と裏地両方縫う。



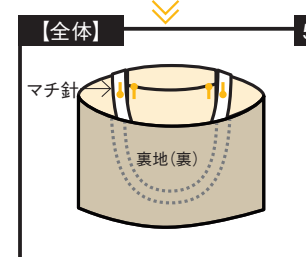
⑧ひっくり返し、袋口を1周縫ったら出来上がり(仕上がり線は引いてないので、端から3mm程度)。ステッチになるので好きな色の糸で縫うとポイントになります!



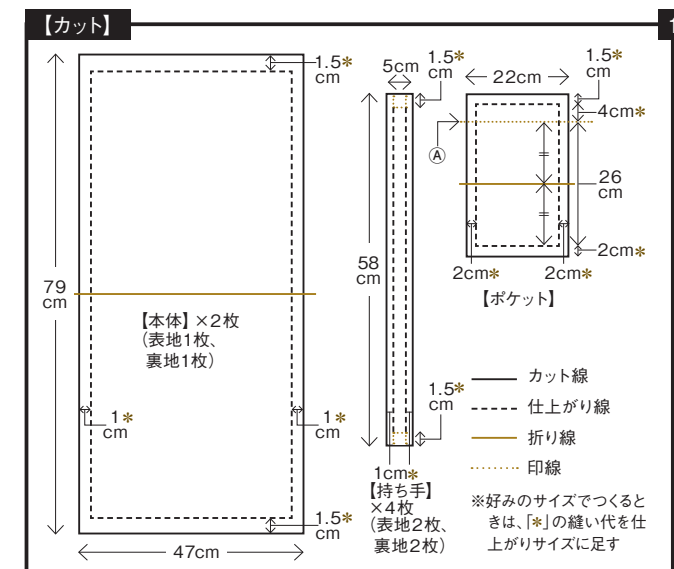
④まっすぐ縫うコツは、ミシンにテープを貼って、テープの端に布の端を合わせる。縫う場所が同じ場所になる。



⑨【ポケット】に収納。ポケットをバッグの外に出し、ポケットのサイズに合わせて、バッグを折る。ポケットと反対側から巻くように3回折り、ポケットの中に収納。



⑤【全体】を合わせる。ポケットを本体(裏地(表))の中心とポケットの中心に合わせて置き、ポケットの両横に持ち手を置く。持ち手は、裏地側を本体の裏地に重ねる。マチ針で止める。反対側の持ち手も同様。



①【カット】する。布の裏に「仕上がり線」と「印線」をつけ、「カット線」でカットする。サイズは右表も参照。【ポケット】をつくる。前号の②～④を参照(前号はウェブサイトでご覧いただけます。アドレスは35ページをご覧ください。)

単位 = cm	本体		持ち手		ポケット	
	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ
カットサイズ	79	47	58	5	37	22
仕上がりサイズ	76	45	55	3	17(13)	18

食中毒にご用心

衛生状態の芳しくない派遣国での食生活では、食中毒による腹痛や下痢などの消化器症状のリスクが高まります。特に気温と湿度が高くなる夏は、細菌が増殖しやすく、細菌性の食中毒が発生しやすくなるでしょう。食中毒の原因となる代表的な細菌には次のようなものがあります。

カンピロバクター

肉類に付いている細菌で、特に鶏肉に多く、生の肉を食したり、加熱が不十分だったりすると、食中毒を起こします。ローカルレストランでお肉を注文するときもぜひ「Well done (ウェルダン)」でしっかり焼いてもらいましょう。

黄色ブドウ球菌


人の皮膚に住んでいる細菌で、通常は無害ですが食品に感染して増殖し、食中毒を引き起こすことがあります。

サルモネラ菌


主に卵や鶏肉が感染源です。鶏卵中に一定の確率で混入しているため、よく加熱されていない卵を食べることは控えましょう。派遣国でのTKG(卵かけご飯)は禁物です。

食中毒の原因菌が付いた食品を食べると、細菌が腸内で増え、腹痛、下痢、吐き気、嘔吐、血便、発熱といった症状が現れます。

食中毒を予防するためには……

 **調理の前や食事の前にはしっかり手洗いし、細菌を食べ物に付けない。**

 **細菌の増殖しやすくなる高温多湿を避け、食材は早めに冷蔵後/冷凍庫に。**

 **75℃で1分間以上加熱することで多くの細菌は死滅するため、食材はしっかり火を通す。**

細菌を「付けない、増やさない、やっつける」。この3原則を念頭に、食中毒に十分用心しましょう。

JICA海外協力隊への 外務大臣感謝状授与式・懇談会を開催



隊員代表のあいさつをする大石さん

7月4日、帰国したJICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式が、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて開催されました。授与式には、帰国したJICA海外協力隊74人が出席し、鈴木憲和外務大臣政務官から感謝状を授与されました。来賓として「日本の国際協力 特に青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会」(JICA議連)に所属する園浦健太郎衆議院議員のほか、小田原潔 衆議院議員、井上一徳衆議院議員、また現職参加の帰国隊員の所属先代表者も参加され、北岡伸一JICA理事長も参加しました。

授与式では、鈴木外務大臣政務官に「それぞれの国で、それぞれ出会った方々と信頼関係を築いたことは、草の根外交官として日本と途上国、世界との信頼関係の礎となっているということに感謝しています。それぞれの体験を次の世代の人たちに発信し、伝えていってください」との言葉をいただきました。次に隊員代表として、大石里奈さん(カンボジア・小学校教育・2017年度1次隊)があいさつし、「現地のひとと、文化や言葉の壁を越えて喜怒哀楽を共有できるJICA海外協力隊を心から誇りに思います」と活動を振り返りました。授与式に続いて行われた懇談会では、長谷川美津子さん(日系SV・ブラジル・高齢者介護・2017年度派遣)、太田洋舟さん(モルディブ・小学校教育・2017年度1次隊)が活動を報告しました。

派遣者数と帰国者数

2019年度1次隊の派遣者数、2017年度1次隊の帰国者数はそれぞれ次の通りです。

2019年度1次隊派遣者数	
青年海外協力隊	304人(62カ国)
シニア海外ボランティア	2人(2カ国)
日系社会青年ボランティア	24人(2カ国)
日系社会シニア・ボランティア	1人(1カ国)
2017年度1次隊帰国者数(2019年6、7月帰国/予定)	
青年海外協力隊	209人(53カ国)
シニア海外ボランティア	9人(6カ国)
日系社会青年ボランティア	23人(4カ国)
日系社会シニア・ボランティア	5人(3カ国)

2019年秋募集応募は8月20日から

2019年秋募集の応募受付期間は8月20日から9月29日までです! 広く職種で応募する「一般案件」と一定以上の経験・技能が必要な個別案件へ応募する「シニア案件」があり、いずれも20~69歳の方が対象です。健康診断受診費用は一定額の補助があります。詳しくは、以下のウェブサイトをご覧ください。

選考日程 (予定)	一次合否通知	11月中旬~下旬
	二次選考	12月初旬~中旬
	二次合否通知	2020年2月4日

▶ JICA海外協力隊ウェブサイト「募集情報」
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/>

協力隊の職種をご紹介します! 「職種NAVI」の開催

7月14日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで、職種に特化した応募勧奨イベント「職種NAVI」が開催されました。「協力隊に興味はあるものの、自分に合った職種がわからない」「自分の経験が現地でどんな風に役立つのか、イメージすることが難しい」と悩む参加者に向け、人気職種の技術顧問による応募に向けたアドバイスや、協力隊経験者による活動報告、個別相談(進路相談カウンセラーのカウンセリングや現職参加相談窓口も含む)が行われました。

全国各地から集まった参加者は、「顧問の先生や実際に参加された方のお話を聞いて、派遣のイメージが湧きました」「海外で自分の力を生かしたいという思いが強くなりました」といった声が多く聞かれました。次回は9月14日(土)に、神奈川・横浜市のJICA横浜で開催予定です。詳細は以下のウェブサイトをご覧ください

▶ JICA海外協力隊ウェブサイト「各種説明会情報」
<https://www.jica.go.jp/volunteer/seminar/place/>

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

8月27~30日 TICAD7関連イベント

協力隊事務局もブースを出展します!

JICA青年海外協力隊事務局ブースでは、現在アフリカ各国に派遣されている隊員の活動を紹介予定です。また、「スポーツと開発」をテーマに作成された動画もお披露目されます!

さらにTICAD7開催前日には、前夜祭イベントとして「BON for AFRICA (<http://bon-africa.org/>)」が開催されます。世界各国の人々と一緒に盆踊りを踊り、世界平和のメッセージを伝えます。アフリカ音楽やダンスパフォーマンス、そして熱気あふれる盆踊り! 夏の暑さを忘れる盛りだくさんの内容です。協力隊OVも参加し、祭りを盛り上げます。協力隊事務局ブースにもぜひお立ち寄りください。



<青年海外協力隊事務局ブース>

いつ? 8月27日(火)~30日(金)

どこ? パシフィック横浜アネックスホール(神奈川県横浜市)

<BON for AFRICA>

いつ? 8月27日(火) 17:00~20:00

どこ? 「象の鼻パーク」Aゾーン(神奈川県横浜市)

神奈川

8月22日 学生・教員のためのSDGsワークショップセミナー

持続可能な社会をつくるための「つくる責任・つかう責任」を共に考えるセミナー。ファシリテーターは国際協力推進員(滋賀県)の山本康夫さん(ケニア・青少年活動・2014年度1次隊)です。

いつ? 8月22日(木) 10:00~16:30(申込締切:8月20日(火))

どこ? KYOCA京果会館 3F HACOBA(京都府京都市)

詳細 「JICA関西」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

京都

8月31日 世界ふれあいひろば2019

観て食べて交流して、世界のとびらを開こう!

開発途上国から来日中のJICA研修員や、札幌市国際交流員と交流できるこのイベントも今年で17回目! 青年海外協力隊ブースや国際協力関連のNGOのブース、屋台も出展します。

いつ? 8月31日(土) 10:00~15:00

どこ? JICA北海道(札幌)(北海道札幌市)

その他 民芸品があたるスタンプラリーも実施します!

北海道

コーヒーファンに向けたセミナーで 青年海外協力隊OGが活動を報告

7月15日に愛知・名古屋市のJICA中部で、一般のコーヒーファン向けに全国で定期的に開催されているセミナー「コーヒーサロン」が行われました(共催: JICA)。このセミナー



現地の活動について話す玉田さん

で、ルワンダのコーヒー農園で現地の生産者に対して栽培技術の指導などを行った玉田侑希さん(ルワンダ・コミュニティ開発・2016年度4次隊)が活動を報告しました。

「コーヒー危機とSDGs」をテーマに行われた同セミナーには70人以上が集まり、参加者からは「玉田さんの活動発表に感動した。多くの若者が青年海外協力隊に参加し、海外を体験してほしいと強く願う」といった感想が聞かれました。

つぶやき

お題 ▶ 生活の知恵



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

持続可能なエネルギー

「うんち～」と聞くだけで日本の小学生は笑う。子どもを笑顔にする偉大な言葉だ。それはこの国では、もっと偉大なのだ。なぜなら、遊牧民の生活に必要な燃料になるからだ。大自然の中に馬・牛のそれはあり、乾燥しており臭いもない。そのため子どもたちは、「ここにもある。あ！あそこにもあるよ」と言いながら顔よりも大きいそれを私に見せてくれた。この燃料は、彼らの生活と子どもたちの笑顔をつくる持続可能なエネルギーだ。

ペンネーム：広島風お好み大好きさん(女性) 協力隊員(アジア・小学校教育・2018年度派遣)

★この国のお祝い

祭りや祝いごとととにかく好きな人が多い、派遣国。結婚式や誕生日はもちろん、新居祝いまで大盤振る舞い。新しく家を建てた人が、ご馳走を用意してたくさんの友人を招きます。そして招かれた友人がさらに友人を呼ぶことも当たり前。現地で知り合ったAさん「ご馳走もらえるから行こうよ！」私「そのホストの人知らないし……」Aさん「ノープロブレム！」いや、あなたとも初めて話したんですけど……。

ペンネーム：野菜マシマシさん(男性)
協力隊員(アジア・コミュニティ開発・2018年度派遣)

★★日曜日

朝8時、教会から聞こえる大きなスピーカー音とお祭りのようなどんちゃん騒ぎ、そうだ今日は日曜日。普段は、鶏の鳴き声、日曜日は、生徒の「エーメン」の声が目覚ましのアラーム代わりな生活もいつの日か恋しくなる日が来るかもしれない。このユニークなアラームに助けられ、寝坊したことは1度もない。この国は、朝が苦手な人々の救世主になるかも……。

ペンネーム：鶏の友達さん(男性)
協力隊員(アフリカ・体育・2018年度派遣)

★★★行ってみるまでわからない

派遣国では、スーパーに欲しいものが欲しいときに置いてあるということは稀である。ニンジンを買に行った日に限ってニンジンだけないなんてこともざら。そんな環境だからこそ、毎日買い物に行ってから買う物を決めることに慣れ、そのくじ引きのような感覚が逆に癖に。これも楽しく生きる知恵かも。色んなものがあると逆に迷ってしまうようになりました。

ペンネーム：カトゴレさん(男性)
協力隊員(中南米・数学教育・2018年度派遣)

募集中のお題

「おまじない」「原動力」「質問」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

就職・進学を始め各種情報の提供など帰国隊員の進路決定までをサポート



JICA進路相談カウンセラー／ 青年海外協力隊相談役の紹介



今月の相談 (就活編)

よくある相談に進路相談カウンセラー／
青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 方向が定まらず 気持ちが焦ってきました。

帰国してから3カ月経ちましたが、まだ自分のやりたいことが見つかりません。しばらくのんびりしたいのですが、焦りもあります。

A. 焦る必要はありませんが、 準備をしておきましょう。

環境は日々変わっていくので、「さあ、動き出そう」と思ったとき、すぐに行動できるように、以下のような準備をしておきましょう。

- ①活動の振り返りとともに、その活動を生涯の仕事として捉えてみる…活動を仕事に生かすのか、新分野へ向かうのか、キャリアの整理ができてきます。
- ②環境の変化に敏感になる…新聞やネットでビジネス系の記事を読む、人と会ってナマの情報を得るなどしてみましょう。
- ③将来のキャリアプランを「可視化」してみる…5年後、10年後、30年後のあなたはどうか、を逆算して考えてみましょう。
- ④期限を切る…○月△日から動き出すなど目標期日を設定することも大切です。

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役に、進路・就活の悩みなど、いつでもご相談ください。



しんがきみつひろ
新垣光博さん(青年海外協力隊相談役)

担当地域：沖縄

✉ jicaaicp-cda@jica.go.jp

●経歴：沖縄県監査委員事務局長、同土地開発公社理事長等を経て、2014年度より進路相談カウンセラー、今年度より現職。沖縄県協力隊を支援する会副会長兼務。

各国でご活躍の隊員の皆さん、お元気ですか。もう現地の食べ物や言葉に慣れましたか。カウンターパートや同僚との関係はうまくいっていますか。経済的に恵まれた先進国が、発展途上にある国々を支援することは当然のことです。

隊員の皆さんは、日本の人々を代表して、それぞれの派遣国において、いろいろな課題を抱えている人々に実際に寄り添い、手を差し伸べておられます。その活動は、誠に尊いものであり、心から敬意を表するものであります。そのような皆さんの帰国後の支援策の一環として相談役が設置されています。是非ご活用して頂きたいと思えます。なお、沖縄センターの相談室は、美しい庭に面して進路相談するのに絶好の環境にあります。帰国後、連絡をお待ちしています。

ありさとやすのり

有里泰徳さん(青年海外協力隊相談役)

担当地域：大分・宮崎・鹿児島

✉ jicacikp-cs2@jica.go.jp



●経歴：1977年より県立学校教諭。2015年退職まで約30年間県高文連国際・ボランティア専門部を指導。研修受講生等関係者から多数の青年海外協力隊員を輩出。その間、九州地区国際研事務局長・全国国際研常任理事等を歴任。現在も、ボランティア協会・ユネスコ協会等で活動中。18年7月より宮崎県青年海外協力隊を支援する会事務局長。18年5月より現職。

『楽しかった修行』、帰国した隊員のひと言。国内においては、残念ながら海外でのボランティア活動(国際貢献活動)を実務経験と捉えない側面もあります。そういう中でこそ、「Make a Difference！」=新たな価値ある変化を創りだす必要がありそうです。異文化社会の中で培われた幅広い視野と貴重な体験は、意外と地方や地域社会の中で発揮できるのかもしれませんが。協力隊で得た「自信」がこれからの仕事の土台となるはず。グローバルな視点を持った「フロンティア“人財”」として、「新たな修行」の一歩を南九州の地で踏み出し、人生の扉を切り拓いてみませんか？
I・J・Uターンを含めて相談してください。

クロスロード

令和元年8月号 [第55巻第7号 通巻649号]
発行日 令和元年8月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室

crossroads@sojocv.or.jp



【お詫びと訂正】

2019年4月号12ページに掲載されている荒木拓一さんの肩書きに誤りがございました。読者の皆様、関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

誤) 元東京国際大学講師
正) 元東京国際大学非常勤講師



CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



チームティーチングに応じてもらえず、 任地が嫌いになっていました。

しまもと さとりのり
文=嶋本紗季里さん

- ▶ マラウイ
- ▶ 青少年活動
- ▶ 2017年度2次隊

PROFILE

1993年生まれ、岐阜県出身。国士館大学体育学部を卒業後、2017年10月、協力隊員としてマラウイに赴任。19年10月に帰国予定。

活動概要

マンガチ教師研修センター(マンガチ県マンガチ市)に配属され、小学校の「表現芸術」(音楽や体育、図工などを行う授業)に関する主に以下の活動に従事。

- 現地教員とのチームティーチングを通じた指導力向上支援
- 音楽の基礎知識の指導
- 指導法を伝える教員向け研修会の開催

私はマラウイ南部のマンガチという町に住んでいます。ヤシの木やバオバブの木が生え、常夏の景色が綺麗なこの町に住めることを、赴任当初は嬉しく感じていました。しかし、思い描いていたイメージとは違う現実に悩まされ、次第にマンガチが嫌いになっていきました。

私の配属先は、学校の教員を対象に研修などを行う機関。音楽や体育、図工などを行う「表現芸術」という授業について、現地の小学校教員の指導力向上を支援するというのが要請内容でした。ところが、彼らに「チームティーチングをしましょう」と呼びかけても応じてもらえず、やる気が感じられなかったのです。さらに、町で住民に人種差別的な言葉を浴びせられることもあれば、配属先の人たちに意見を真剣に受け止めてもらえないこともある。そうして、家から出ることすら苦痛になっていきました。

それでも、巡回先の小学校では教員たちに挨拶をし、彼らと会話することを怠らず、「一緒に授業をしませんか」と粘り強く声をかけ続けました。その結果、ようやくチームティーチングを受け入れてくれる教員が見つかり、活動が軌道に乗り始めます。そこに至るまでに6カ月かかりました。

その後、多くの教員たちと、たった35分間の授業の計画を何時間もかけて一緒に作りあげていけるようになりました。「サギリから学びたい」「教員研修をしてくれ」と声をかけてくれる教員も増え、「教員たちはや

る気がない」という着任当初の認識が間違えだったとわかっていきました。

教員たちの家に呼ばれ、ご飯をご馳走になる、あるいはマーケットのお母さんたちと他愛のない会話を楽しむ——。今では、そんな時間がこのうえなく心地良く、マンガチは帰ってくるたびにほっとする、大好きな場所になりました。

＼YELL!!／
アクセルもブレーキも、
踏むのは自分自身!

挑戦してみなければ、「失敗」も「成功」もなく、「悲しい」も「嬉しい」もありません。ときにおおいに悩むのも良いと思いますが、その後は行動! そうして初めて何かが見えてくるはずです。与えられた環境で、どこまで進めるかは自分次第です!



体育の授業で体操を行うために整列をさせる嶋本さん(左端)



今月号の表紙
ホンジュラス



たくま だいじろう
文=宅間大二朗さん
(ホンジュラス・青少年活動・2016年度2次隊)

ホンジュラスの課題である青少年の非行防止・心身の健全育成を目的に、任地ラ・パス県カネ市で空手道教室を新たに開講し、指導することが私の主な活動のひとつでした。写真は、任地で日本文化紹介イベントを実施した際、舞台発表のひとつとして教室の生徒たちが演武をしているところです。照りつける太陽の下、熱くなった屋外の地面にも動じず、裸足で礼儀・規律の心を体現し、日頃の稽古の成果を発揮してくれた彼らの姿がとても眩しく、印象に残っています。